

イーリアス（十六・完）

ホメーロス輪読会

第二十三の歌（承前）

足の速い戦車乗りたちに真先に輝かしい賞を
置いた³批の打ち所のない手仕事を知っている女を連れて
行くことを

そして耳の付いた二十二メトロン入りの鼎を、

一等賞として、そして又二等賞には馬を置いた

六歳の未だ馴らされていない、驟馬の仔を腹に持った初
産の

それから三等賞には未だ火にかけてない大釜を置いた

美しい、四メトロン入りの、未だ真つさらの、

そして四等賞には二つの金の分銅を置いた、

265

そして五等賞には二つの把手のついたまだ火にかげられ
ていない壺を置いた。

そして彼は真直ぐに立って言葉をアルゴス人らに言っ
た、

「アトレイデースよそして他の良い臍当を付けたアカハイ
ア人らよ、

戦車乗りらを待つてこれらの賞品は置かれた集会の中に。

もし今他の人のためにアカハイア人らが賞を競うのなら
ば

確かに私が真先にそれを得て幕舎に運ぶであろう。

というのは皆も知つての通りどんなにか私の二匹の馬が
力に於て卓越しているからだ

275

270

彼らは不死なのだから、ポセイダーオンが彼らを呉れた

私の父ペーレウスに、そして彼が又私に下さった。

だがまさに私はそして私の単つ蹄の馬たちは控えるのだ、

というのはあんなに馭者の誉れに於て優れた人を失ったのだから、

優しい馭者の、彼は彼らに何度もなめらかなオリブ油を

鬣に注いでやった、きれいな水で洗った後。

二匹は立って彼を悲しんでいる、地面に彼らの

鬣は垂れている、そして二匹は心に嘆きながら立っている。

だが他の者たちは陣営中で準備せよ、アカハイア人らの誰でも

馬たちと結び合わされた戦車とに自信のあるものは、

このようにペーレイデースは言った、すると迅い戦車乗りらは集まった。

真先に兵士らの長工ウメーロス⁽³⁾が立ち上がった、

アドメートスの愛しい息子が、彼は戦車術に卓越していた、

彼に続いてテューデイデースが強いディオメーデースが立ち上がった、

290

そしてトロースの馬たちを轅の下に置いた、その馬らがかつて奪った

アイネイアースから、だがその人をはアボルローンが救い出した。

それから彼に続いてアトレイデースが立ち上がった金鬣のメネラーオスが

ゼウスに出づる者が、そして轅の下に導いた速い馬たちを、

アガメムノンの牝馬アイテヘーと自分のポダルゴスとを、

この牝馬をアガメムノンに呉れたアンキヒーシアデー

スのエケヘーロスが贈り物として、風の吹くイーリオスに彼に従って来なく

てもいいように、そしてそこに留っていい気持ちでいられるように、

というのは大きな財を彼に与えた

ゼウスが、そして彼は広々とした土地シキュオンに住んだ、

その牝馬を彼は轅の下に導いた、大いに競争を望んでい

る馬を。そして四番目にアンティロコホスが鬣の美しい馬たちを準備した、

心の卓越した主ネストールの輝かしい息子が、

285

280

300

295

ネーレーイアデースの、そしてピュロス生れの彼の馬たち
 ちが

足の速い馬たちが車を牽いた、すると父が彼の近くに立
 って

良いことを目指して話した智慧のある人が自分でも心得
 のあるものに、

「アンティロコホスよ、まことお前は若いがそのお前を愛
 される

ゼウスもボセイダーオンも、そして戦車術を教え込ま
 れた

ことごとくの戦車術を、だからお前に教えることは沢山
 は必要でない、

つまりお前は標柱の周りを廻ることをよく知っている、
 だがお前の馬たちは

走るのが最も遅い、だから思うに難しいだろうよ。
 彼らの馬たちはずっと速い、だが彼ら本人は

お前その人より智慧を示すことをより多く知っていない。
 さあお前は、愛しいものは、心に謀り事を入れておけ

あらゆる種類の、賞がお前から逃げていかぬように。
 智慧によって木伐りは力によってよりずっと良い仕事を
 する、

又は智慧によって舵取は葡萄酒色の海で
 迅い船を真直ぐに保つ風に翻弄されている船を、

315

310

305

そして智慧によって馭者も馭者に打ち勝つ。

ところが自分の馬と車とに頼っているものらは
 お構いなしにあらゆるこちらと大きく周る、

そして馬たちはコースから逸れる、そして彼は制御しな
 い、

技巧を知る者はより劣る馬を駆ってさえ、
 ずっと標柱を見ていて近くを廻るのだ、彼は忘れない

どのように最初から牛皮の手綱を引き締めるか、
 そしてしっかりと進路を保つそして先行くものに注目す
 る。

さて私はお前に言おう極めてはつきりした目印を、お前
 はそれを忘れないだろう。

地面の上に一尋ほどの乾いた木が立っている、
 樫か松かの、それは雨で腐っていない、

二つの白い石がその両側から支えている
 途の折り返しのところに、そして競争路の周りは平坦

だ、
 或は誰か昔死んだ男の墓標か

或は以前の人間によって造られた目印だ、
 そして今足の速い神のようなアキヒレウスが目標にし

た。

そのぎりぎりに近付けてお前は車と馬たちとを駆るのだ、
 そして自分ではよく編まれた座席の中で身を傾けるのだ

335

330

325

320

そおつと戦車の左側に、そして右側の馬を
声を励ましながら鞭打つのだ、そして手綱を手から馬に
与えること。

折返し標柱にお前の左の馬を近付かしめよ、
それこそ轂がすれすれに行くように見える程

よく造られた車輪の轂が、だが石に触れることは避けよ、
そのようにしてお前が馬たちを苦しめ車をすっかり壊し
てしまわないように、

他の者たちの喜び、お前自身の恥で

あるう、いや、愛しいものよ、心してよくよく注意せよ。
というのもし車を駆って折り返し点で他を抜くならば、
追いつがってお前を抜くものも並ぶものもないだろう、
仮に彼が後から神のものなるアリーオンを駆るとして
もない

アドレーステースの速い馬を、それはゼウスから来た種
である、
あるいはラーオメドーンの馬たちを、それはこの地でよ
く育てられた。」

このように言つてネーレウスの子ネストールは座に再
び

坐つた、彼の子供に一つづつの要点を言つてから。

メーリオネースが五番目に鬣の美しい馬たちを準備し
た。

350

そして戦車に乗つた、そして彼らは籤を投げ込んだ、
アキヒレウスが振つた、するとネストリデースの籤が飛
び出した

アンティロコホスのが、彼の次に王者エウメーロスが引
き当てた、
その次にアトレイデースが、槍に名つてのメネラーオス
が、

その次にメーリオネースが駆ることを引き当てた、そし
て又最後に
テューデイデースがかけ離れて優れているものが馬たち
を駆ることになった。

そして彼らは一列に並んだ、そしてアキヒレウスが折り
返し点を指し示す
遠くに平坦な平原に、そしてそばに審判を配置した
神に並ぶポイニクスを、彼の父の従者を、
競争を監視して真実を言うように。

さて彼らは一斉に二匹一對の馬たちに鞭を挙げた、
そして紐で打つた、そして言葉で叱咤した
逸り立つて、すると彼らは平原を突き進んだ

迅い船を去つて、すると胸の下で埃が

もうもうと舞い上がった雲か嵐かのように、
そして鬣が風の息と共に流れた。

そして戦車はある時は豊饒なる大地に触れるかと思うと、

365

360

355

ある時は空中で激しく動く、そして戦車乗りたちは
台座に立っている、各々の心は高鳴る

勝利を望んでいる者らの、それで彼らは各々自分の
馬たちに呼び掛ける、すると彼らは埃を立てて平原を飛
んだ。

だがまさに迅い馬たちが遂に競争を終えようとする
とき

灰色の海の上に戻つて来て、その時こそ各々の力量が
現れた、忽ち馬たちの競争は突き詰められた、そして素
早く

ペヘレーティアデース(6)の足の速い馬らが飛び出した。

そしてそれに続いてディオメデースの牡の馬たちが飛
び出した、

トロースの馬たちが、極めて遠くにはいなかった、極く
近くにいた、

つまり絶えず戦車に乗り上げそうに見えた、
そして息でエウメーロスの背中和広い肩とが

暖められた、つまり彼に頭をくつつけて走つたから。
そして今にも抜き去るか接戦になるところであつた、

もしテューデウスの息子にポイボス、アポルローンが怒
りを抱かなかつたなら、

彼は彼の手から輝く鞭を飛ばした。

すると口惜しがっている彼の目から涙が流れた、

385

380

370

375

相手の牝馬たちがさらに一層早く行くのが見えたから、
そして彼の馬たちは鞭なしに走るものだから後れをとつ
た。

だがアテヘーネーはアポルローンがテューディデースを誑
かすのを

見過ごさなかつた、そして逸早く兵士らの牧者のところ
へ行つた、

そして彼に鞭を与え、そして馬たちに力を吹き込んだ、
それから怒つた彼女はアドメートスの息子の所に行つた、
そして馬たちの鞭を女神は壊した、すると二匹の馬は
道の両側を走つた、そして轅は地面に投げ出された。

そして本人は座席から車輪の脇に転がり落ちた、
両肘も口も鼻もすっかり擦り剥いた、

そして肩の上の額を破つた、そして両の目は
涙で溢れた、そしてかれの豊かな声は抑えられた。

そこでテューディデースはその傍らを通り抜けて一つ蹄
の馬を駆つた、

大いに他の者らを引き離して、というのはアテヘーネー
が

馬たちには活力を吹き込み、彼には力を与えたから。
そして彼に続いてアトレイデース金髪のメネラーオスが

位置した。

そこでアンティロコホスは彼の父の馬たちに呼び掛け

400

395

390

た、

「お前たち二匹も頑張り、出来るだけ早く走るのだ。あの馬たちと争おうとは私は言わないぞ、

思慮深いテューデイデースの馬たちとは、あれらにはア
テヘーネーが

今は速さを与えているそして彼には力を加えている、
それでアトレイデースの馬に追いつけ、後れまいぞ、
速く、お前たち二頭に恥を注ぎ込まないように

牝であるアイテヘーが、何故負けるのだ、優れたお前た
ちよ？

というのはこのように私は口に出して言わず、そして確
かに果たされるであろう、

お前ら二匹は兵士らの牧者ネストールの許で世話を受け
ることは

ないだろう、そして忽ちお前ら二匹を青銅で殺すである
う、

もしも全力を盡さず劣った賞を持ち帰ったなら、

いや的を絞って全力を挙げて急げ、

そのことは私自身に取り計らって考えよう、

狭い途で滑り込むことは、やり損じないぞ、

このように言った、すると馬たちは主の叱責に恐れ戦
いて

短い間前よりも速く疾走した、すると素早く

415

410

405

凹んだ道の狭隘部を戦に勇ましいアンティロコホスは見
て取った

地面の陥没部があった、そこで冬の水が流れ込んで
道の一箇所を壊した、そしてそのあたり一帯を低めた、
そこでメネラーオスは車が接触するのを避けて進んだ、

だがアンティロコホスは追い越して単つ蹄の馬たちを走
らせた

道の外側を、そしてコースを少し逸れながら駆り立てた。
そこでアトレイデースは恐れたそしてアンティロコホス
に呼び掛けた、

「アンティロコホス、君は無謀に馬を駆っている、馬を控
えなさい、

道が狭いだから、すぐに追い越せるほど広くなる、
車を打ちつけて両方とも損なわないように、」

このように言った、だがアンティロコホスはもっと速
く駆った

鞭で駆り立てながら、恰も耳が聴こえぬ人のように。

そして肩から投げられた円盤が飛ぶほどの距離、

その円盤を逞しい男が若さを試して投げる、

それ程を駆けた、それでそっちの馬たちが後に引いた

アトレイデースのが、というのは自分で心して駆るのを
控えたから、

どうかして単つ蹄の馬たちが道でぶつからないように、

435

430

425

420

そしてよい手摺のついた戦車を覆さぬように、そして彼自身か

勝利を競い合つて埃の中に落ちないように。

再び彼を非難して金髪のメネラーオスが言った、

「アンティロコホスよ、お前より邪悪なものは死すべき者

の中で他にいない、

行け、我々アカハイア人らは全くお前を正しいとは思わないのだから。

だが決して決してそのように誓いなしにはお前は賞を得ないであろう。」

このように言つて馬たちに呼び掛け語りかけた、

「決して引き下つても立ち止まつてもならないお前たちは悲しんでいるが、

あれらの足と膝とは先に疲れるであらう」

お前らのより、というのは二匹とも若さを欠いているから。」

このように言つた、すると馬たちは主の叫び声を恐れて

大いに走つた、そしてすぐに彼らの近くに來た。

さてアルゴス人らは競技場に坐つて見つめていた

馬たちを、そして馬たちは平原から埃を立てて飛んでいった。

そして真先にクレイター人らの指導者イードメネウスが

445

馬たちの姿を認めた、

というのは競技場の外で一番高く見張台に坐つていたから、

そして彼から離れたところで叫んでいる人の声を聴いて

識つた、そして見た極めてはっきりと先頭にいるのを、

その馬は他の部分では真赤であつた、そして額の真ん中に

白い印があつた月のように真ん丸な。

そこで彼は真直ぐに立つたそして言葉をアルゴス人らに言つた、

「皆さん、アルゴス人らの指導者であり支配者である方々よ、

私だけが馬たちを見ているのかそれともあなた方もか？

他の馬たちが先頭にいるように私には思える、

そして別の馭者が見えている、するとあの牝馬たちは平原でへたばつたのだ、あれらがより早かつたのに、

というのは實際折返点を真先に廻つたのを私は見た、だが今は全く見ることが出来ない、私の両眼は到るところ

トロイアの平原を眺め廻し視るのだが、

馭者を手綱が逃げたのが、そして出来なかつた

上手に折り返しを保つことが、そして廻つてるときにうまく行かなかつた、

440

460

465

450

あそこで彼は落ちたのだと思うそして車が壊れた、
そして牝馬たちは逸れた、力が気持ちをつかんだから。
だが君たちも立ち上がって見てくれ、というのは私は
よく識別できないから、私にはあの男のように思える
アイトロスの出の、そしてアルゴス人らを統治している、
馬を馴らすテューデウスの息子、剛勇のディオメデー
スだ。」

470

すると彼を辱めてオイレウスの敏捷なアイアースが口
汚く言った、

「イードメネウスよ、どうしてお前は早まって大きな口を
叩くのか？ まだ遠くを

足を高く挙げる牝の馬たちは広い平原を馳せている。

あなたはアルゴス人らの間でそんな風で最も若いわけ
もなく、

あなたの両眼は頭から飛び出して最も鋭く見るわけでも
ない、

それでいてあなたはいつも数多く喋る、決してあなたは
お喋りであることはないのだ、というのはあなたより優

れた他の者らがいるのだ。

いや同じ牝馬らが首位にいる、以前に首位であった牝馬
らが、

エウメーロスの、そして彼本人が戦車の中で手綱を握っ
て進んでいる。」

480

すると彼に怒りを掻立てられてクレイテー人らの指導
者が言い返した、

「アイアースよ、争いに長けたものよ、もの見えない人
よ、また他の全てについて

アルゴス人らに後れを取るだろう、あなたの心は頑なだ
から。

さあここに来なさい、鼎が大釜を賭けようではないか、

双方は審判としてアトレイデースのアガムノーンを置
こう、

どっちの馬が先か、お前が償うことによって知るように。」
このように言った、すると忽ち敏捷なオイレウスのア

イアースは立ち上った

怒って重大な言葉で言い返そうとして、

そして今にもまさに先の方で双方に争いが起きたことだ
ろう、

もしアキヒルレウスその人が立ち上がって言葉を言わなか
ったら、

「もはや今は重大な言葉で言い争ってはならない、
アイアースもイードメネウスも、ひどい言葉で、相応し
くないのだから。

他の者にだつたら二人とも腹を立てよう、こんな風に振
舞うものがいたら。

あなた方は競技場に坐って見なさい

490

495

485

馬たちを、彼らは勝利を得ようと一生懸命になつてここにやつて来るだろう。その時各々は知るだろう。アルゴス人らの馬たちを、どれが二着でどれが一着かを。」
 このように言つた、だがテューデイデースは極めて近くに戦車を駆つて来ていた、
 鞭で絶えず振りかぶつて駆り立てた、すると彼の馬たちは

いち早くコースを終えようと高々と飛び跳ねた。
 絶えず馭者に埃の粒が降り掛つた、
 金と錫とで被せた車は

足の速い馬たちの後を走り続けた、そしてほとんど車の轍の跡は後につかなかつた

うつすらと積もつた埃の上に、そして二匹は急ぎ駆つた。そして彼は競技場の真中に止つた、沢山の汗が溢れ出た馬の首と胸とから地面に。

そして本人は輝きわたる戦車から地面に躍り出た、そして鞭を鞭に凭せ掛けた、ぐずぐずしなかつた

力強いステヘネロスも、いや大急ぎで賞品を攫んだ、そして心の大きい戦友たちに女を連れて行くよう与えたそして耳付きの鼎を持って行くように、そして馬たちを解き放つた。

彼に次いでネーレウスのアンティロコホスが馬たちを駆つた、

510

505

500

策略によつて、速さではなく、メネラーオスを抜いて、だがその位メネラーオスは速い馬を近くに保つていた。馬が車輪から隔たる位、その馬は主を戦車と共に平原から牽いて走つて、

車輪のタイヤに毛の先が触れる

尻尾の毛の先が、車は極く近くを走り、ほんの少しの隔たりしか間がない、広い平原を走つていて、

それ程にメネラーオスは批の打ち所のないアンティロコホスに

後れた、だが始めは円盤の距離程も後れていたのだ、

それが忽ち彼に追い迫つた、というのは元気が高まつた

のだ

アガメムノーンの馬の、鬣が美しいアイテヘーの、

もし更にお互いの競争がもっと長かつたなら、

その時は彼を抜いていたろうそして接戦にはならなかつたであろう。

そしてメーリオネースが、強いイードメネウスの従者が、高名なメネラーオスに槍の飛距離ほど後れを取つた、

彼の鬣の美しい馬たちは最も遅かつたから、

そして本人は競技場で車を駆るのに最も劣つていたから。そしてアドメートスの息子が他の者らの一番後にやつて

来た、

美しい車を曳いて、馬たちを前方に駆りながら。

530

525

520

515

すると彼を見て哀れんだ足の速い神のようなアキヒルレウスが、

そして立ち上つてアルゴス人らに翼のある言葉で語りかけた、

「最後に最も優れた男が単つ蹄の馬たちを駆つている、いやあの男に我々は賞を与えよう、相応しいように、

二等賞を、一等賞はテューデウスの息子に与えよう。」

このように言つた、すると彼ら皆は彼が言つことに同意した。

そして今にもアキヒルレウスは彼に馬を与えたことだろう、アカハイア人らが同意したのだから、

もしもアンティロコホスが心の大きいネストールの息子が

立ち上つてペーレイデースのアキヒルレウスに自分の取り分を主張して答えなかつたら、

「おおアキヒレウスよ、大いにあなたに私は怒るだろう、もしあなたが成したら

その言葉を、というのは賞をあなたが奪い去ることになるから、

こついうことを思つてつまり彼が彼の車と速い馬とを壊した

本人は優れているのに、だが彼は不死なるものらに祈ればよかつたのだ、そつすれば競争してびりて来るこ

545

ともなかつたらう。

もし彼をあなたが気の毒に思つのならそしてあなたの中に彼を愛しむのなら、

あなたの幕舎には金が沢山、青銅が沢山ある

そして牛たちも、あなたの女奴隷たちも単つ蹄の馬たち

もいる、

それならその中からとつて彼に与えたら良いしかももつと好い賞を、

あるいは今すぐに、アカハイア人らがあなたを誉め称えるように。

この牝馬たちを私は渡さないぞ、そしてこの馬のためにやつて見るといい

男たちの中で私と腕で戦おつと望むものは、」
このように言つた、すると足の速い神のようなアキヒルレウスは微笑んだ

アンティロコホスを喜んで、彼にとつて大事な友であつたから、

そして彼に答えて翼のある言葉を語りかけた、

「アンティロコホスよ、もし君が私に命じるのなら家から取り出して他のものを

エウメーロスに授けよ、私はそのことを果たそつよ。彼には鎧をやるう、それをアステロパイオスから私は剥いだ、

560

555

550

青銅のものを、その周りには輝く錫の表被が

取り巻いている、それは彼にとても値打ちのあるものとなる。」

と言った、そしてアウトメドーンに親しい友に命じた幕舎から運んでくるように、それで彼は行って持って彼に持って来た、

そしてエウメーロスの手に置いた、すると彼は喜んで受けた。

すると彼らに向って今度はメネラーオスが心に怒って立ち上った、

アンティロコホスに大層怒って、その手に伝令使は標の杖を置いた、そして静まるように命じた

アルゴス人らに、するとその時は神に等しい男は語りかけた、

「アンティロコホスよ、以前は賢かったものよ、何ということをお前はするのだ。」

私の技を辱め、私の戦車を傷つけ、

お前の戦車を前に投げ込み、それはずっと見窄らしいものを。

さあどうぞ、アルゴス人らの指導者であり支配者である皆さんよ、

双方の真中に判断して下さい、決して依怙鼻厘のないように、

570

565

いつかアカハイア人らの誰かが言わぬように、

『アンティロコホスをメネラーオスは詐術で勝って馬を駈って行った、だが彼のにひどく劣っていた馬たちが、そして彼は術においても強さにおいてももっと強かった。』

さあ私は私自身で提案しよう、そして思うに誰も私をダナオイラの中の他の誰も批難しないだろう、つまり順当だろうから。

アンティロコホスよ、さあここに来い、ゼウスに育てられたものよ、これが慣わしなのだから、

馬たちと戦車の前に立て、そして鞭を

しなやかな鞭を手に持て、その鞭で今まで馬を駈ってき

た、

馬たちに触りながら地を抱くガイエーオコホスの地を震わすエンノシガイオスに

誓え私の車をわざと策略をもつて邪魔したのではないと。」

すると彼に対して賢明なアンティロコホスが答えた、

「今は堪えて下さい、というの私はずっと若いあなたより、メネラーオス王よ、あなたは年上で優れている。

あなたは若い人間の逸脱がどれほどであるかを御存知だ、

585

580

575

心が性急で、考えが浅い。

だからあなたのお心は堪えて下さい、馬はあなたに私自身

身が
差し上げましょう、それを受けた私自身が。もし家から
他に

もつと好いものをお求めでしたら、そしてら直ちに差し
上げることを

考えています、ゼウスに育てられたものよ、全ての日に
あなたの心から落ちるよりはそして神靈ダイモンに対して罪ある
ものであるよりは。」

と言った、そして馬を大いなる気力を持つネストール
の息子は連れて

メネラーオスの手中に置く、すると彼の心は
温められた恰も穂に露が降りると

伸びた麦の穂に、すると畑は波打つように、
そのようにお前の、メネラーオスよ、胸の内では心が温め
られた。

そして彼に声に出して翼のある言葉を語りかけた、

「アンティロコホスよ、今は君に私自身が譲るつ
腹を立ててはいるが、気の狂った人でもなかったし軽率
でもなかった

以前は、今は若さが理性に勝つたのだ。
次には一度と長上を誑かそつとすることは避けよ。

605

600

595

590

というのはアカハイア人らの他の男は直ぐに納得しなか
つたらうから、

だがあなたは大いに苦しみ大いに苦労した、
あなたの勇敢な父も兄弟も私のために苦労した、

だから懇願しているあなたに私は従おう、そして又馬を
私のものではあるがあなたにやろう、これらの皆知る
ように

私の心は決して傲慢でも頑固でもないことを。」

と言った、そしてアンティロコホスの従者ノエーモ
ーニに与えた

馬を連れて行くように、そして彼の輝く釜を取った。

メーリオネースは二つの金の分銅を取り上げた

四番目に、四等で来たから。そして五等の賞品が残った、
二つの把手のある壺が、それをネストールにアキヒルレウ
スは与えた

アルゴス人らの集りの中に連れて行って、そして傍らに
立つて言った、

「さあ、あなたにはこれを、老人よ、宝になるよう、

パトロクロスの葬式の記念になるように、というのはも
はや彼を

アルゴス人らの間にあなたは見ないだろうから、あなた
にこの賞を上げます

何ということなく、というのは拳で戦わないでしょうか

620

615

610

ら、組み合いもしないでしょうから、

もはや槍投げ競技に入り込むこともないでしょうし、足で

走ることもないでしょう、というのにはもはや重い老いが押え付けているから。」

このように言つて手に置いた、すると彼は喜んで受け取つた、

そして彼を声を出して翼のある言葉を語りかけた、

「全く以てそれらすべてを、息子よ、配剤モトラ通りにお前は言つた、

というのはもはや私の手足は、親しいものよ、足はしっかりと

かりしていない、腕も

両の肩から楽々と動かない。

私が若盛りであつて私の力がしっかりと欲しい
エペイオイらが統治者アマリユンケウスを葬つたときの
ように

ブーブラシオスで、そして子供さんたちが王のための賞
を置いた、

その時誰も私に匹敵する男はいなかつた、エペイオイら
の中にも

肝心のピュリオイらの中にも又心の大きいアイトーリア
人らの中にも。

拳ではクリュトメーデースに勝つた、エーノプスの息子

に、

そしてレスリングではブレウローンのアンカイオスに、
彼は私に向つて立つた、

徒競走ではイーピヒクロスを追ひ抜いた彼は好い走り手
だつたが、

槍では投げ勝つたヒヒーレウスとポリュドローロスとに。
戦車競技でだけは私を追ひ抜いたアクトリオンの双子

が、

数を頼りに先駆けて、勝利を急いだから、
そのためにこそ最大の賞があそこに残つた。

だが彼らは二人がかりであつた、一人がしっかりと手綱
を執り、

しっかりと手綱を執り、もう一人が鞭をふるつた。

かつてはそんな風であつたが、今はもう若い人たちに任
せましよう

ああ言つたことは、そして私はおぞましい老いに
従わなくてはならない、だがかつては戦士たちの中で際
立つていたのだ。

さあ行つて君の友人をも賞によって葬りなさい。

これを私は喜んで受けます、私の心は喜んでいて、
私のことをいつも君に親しいものと覚えていてくれ、私

も君を忘れない

名誉に関してはアカハイア人らの間で私は尊重されるの

に相応しい。

そして君にはこれらの代りに神々が思つ存分の恵みを与えられるように。」

このように言つた、するとペーレイデースはアカハイア人らの大群衆を抜けて

行つた、ネーレイデースの長広舌全部に耳を貸してから。その次に彼は苦痛を生む拳闘の賞を置いた、

労苦に耐える驃馬を連れて来て競技場に繋いだ。六歳で未だ馴らされてないやつを、それは馴らすのが最も難しい、

そして敗者のために双把手の杯を置いた。

そして真直ぐに立つてアルゴス人らに言葉を言つた、
「アトレイデースよそして他の好い臍当を着けたアカハイア人らよ、

二人の男をこの賞品のところに呼ぼう、最も強い二人を、大いに手を挙げて拳で戦つたために、彼にアポルローンが

耐える力を与えた者その者が、全てのアカハイア人らは知るように、

労苦に耐える驃馬を幕舎に連れて行くように、

そして敗れたものは二つの把手の杯を持って行くのである。」

このように言つた、すると忽ち強くて大きい男が起ち上つた

660

拳闘を心得た、パノペウスの息子エペイオスが、

そして労苦に耐える驃馬を提んで声に出して言つた、
「早く出てこい誰でも両把手の杯を持って行くやつは、

驃馬をアカハイア人らの他の誰も連れて行かないと思つて

拳闘で勝つて、私が一番強いのだと言つておくのだから。私が戦さに適さないというだけでは充分でないのか？

どうしたつて
全てのことで優れた男であるということはないのだ。
だから私はこう言つぞ、それは実際に実現されてあるだ

らう、
すっかり肉をも破り骨をも折つてやる。

そして彼の縁者らはここですっかり一緒に留まつている
が好い、

彼らは彼を運び出すように私の腕でやつつけられた彼を。」

このように言つた、すると全ての者らはひっそりと静まり返つた。

その中でエウリュアロスだけが彼に向つて立ち上つた、
神に等しい男が、

王タライオニデースのメキステウスの息子、

彼はかつてデーバイに來たオイディプスが死んだ時(つ)葬いに、そこで全てのカドメイオンらに勝つた。

680

675

670

665

彼のことを槍に名づつてのテューデーデースが世話を焼いた

言葉で元気づけつつ、そして彼の大きいなる勝利を望んだ。そして真先に廻しを投げ掛けた、そしてそれから放牧の牛のよく截られた紐を与えた。

そして二人は身支度を整えてから競技場の真中に行った、そして両者は向い合つてその頑丈な両腕を同時に上に挙げて

渡り合つた、そして彼らの重い腕を交差した。

凄まじい齒噛みの音が起つた、そして汗が流れた

体中から、すると神のようなエペイオスが襲いかかつた、

そして注意して相手を窺つている者を頬を打つた、する

ともはや長く

立つていられなかつた、というのはそこで輝く手足がく

ずおれたから。

恰も北風の漣なみだの下から魚が跳上る時のように

藻に覆われた浜に、そしてそれを黒い波が隠す、

そのように打たれて彼は跳び上つたすると心の大きいエ

ペイオスは

腕で捕まえて立たせた、すると親しい友人たちが取り圍

んだ、

彼らは彼を競技場を通り抜けて連れて行つた引摺る足で

血の凝りが垂れている彼を、頭を片方に傾けている彼

695

690

685

を、

そして放心状態にある彼を彼らの間に連れて行つて坐ら

せた、

そして自分たちは行つて双つの把手の杯を持って来た。

するとペーレイデースは直ぐに三つ目の賞を下に置い

た、

ダナオイらに示しながら、痛みを齎すレスリングのため

の賞を、

勝者には大きい火にかけられる鼎を、

その鼎を十二匹の牛に彼らの間で評価したアカハイア人

らは、

そして敗者には女を真中に置いた、

多くの仕事を知っている女を、彼女を皆は四匹の牛に評

価した。

そして真直ぐに立つて言葉をアルゴス人らに言つた、

「この賞を試みようとする者らは起ち上れ。」

こつ言つた、するとその時大きなテラモーンのアイアー

スが起つた、

策略に長けたオデュセウスも立ち上つた、ずるさを知つ

ている。

二人は回しを締めながら競技場の真中に行つた、

お互いの頑丈な腕と腕とを組み合せた

恰も垂木のように、それを大工らの名高い人が組んだ

710

705

700

高い館の垂木を、風の力を防ぐために。

すると背中がぎしぎしと鳴った強い腕の力に

絶え間なくひかれて、汗がびっしょりと流れ落ちた、

密集した蚯蚓腫れが脇腹と肩とに

赤い血の色をしたのが浮き上がった、そして彼らはいつ

までもいつまでも

勝利を望んでいたよく作られた鼎のために、

オデュッセウスは投げけることも地面に倒すことも出来なかつた、

アイアースも出来なかつた、そしてオデュッセウスの強い

力は抑えた。

だが好い臍当を着けたアカハイア人らが退屈した時、

その時彼に話し掛けた大きなテラモーンのアイアース

が、

「ゼウスに出づるラーエルティアデースよ、策略に長ける

オデュッセウスよ、

私を君が持ち上げるか、私が君をか、それは全てゼウス

がお考えのことだ。」

このように言つて持ち上げた、だがオデュッセウスは

策略を忘れなかつた、

胸を狙ひ澄して後から撃つた、すると手足はぐにやぐに

やとした、

そして仰向けに彼は倒れた、そして胸の上にオデュッセ

ウスは

落ちた、そして観衆はまた目を見張つて驚嘆した。

次に又差し上げた忍耐強い神のようなオデュッセウスが、

少しだけ地面から動いた、だがそれ以上挙げることは出

来なかつた、

膝が巻き付いた、そして地上に両方とも倒れた

お互いに近々と、そして埃に塗れた。

そして今にも三度目に再び跳上つて闘つたことだろつ、

もしアキヒルレウスその人が立ち上つて引き止めなかつた

なら、

「もう闘つのは一人とも止めなさい、禍によつて疲れなざ

るな、

両方とも勝ちにしよう、等しい賞を取り上げて

持つて行きなさい、他のアカハイア人らも競技に加わる

ように。」

このように言つた、すると彼らは彼の言葉をよく聴き

入れそれに従つた、

そして埃を払つて長着キヒトを着た。

さてペーレイデースは直ちに速さ較べのためのもう一

つの賞を置いた、

銀の攪酒器ツを、よく造られている、六メトラ

入りの、そして美しさに於いて地上のすべてに勝つた

大いに、細工に秀でたシドネスらが上手に拵準備えたのだ、

そしてポホイニクス人らが霧の降る海の上を運び、
 そして港に立てた、そしてトホアースに贈物として与え
 た、
 そしてプリアモスの息子リユカーオーンの対価として与
 えた
 勇者パトロクロスにイーンニデースのエウネーオスが。
 そしてそれをアキヒルレウスは彼の友を偲ぶ賞品として置
 いた、
 誰にせよ足の速さに於いて一番であるその者のために、
 二等賞にはまた牛を置いた大きくて脂で肥えた奴、
 そして最尾賞には半タラントンの金を置いた。
 そして真直ぐに立ったそしてアルゴス人らのなかで言葉
 を言った、
 「起ち上れこの賞を試みんとするものは。」
 このように言った、すると忽ちオイレウスの迅いアイア
 ースが起った、
 そして策略に富むオデュセウスが、それからネストール
 の息子
 アンティロコホスが、というのは又全ての若者に彼は足
 で勝ったから。
 そして彼らは一列に並び、そしてアキヒルレウスが折返し
 点を指し示す。
 そしてその折返し点に向ってスタートラインから競技が

755

750

745

始つた、その時素早く
 オイリアデースが飛び出した、それに次いで神のような
 オデュッセウスが頑張つた
 すぐ近くに、恰も素晴らしい帯をした女の
 胸のすぐ近くに箴があるように、その箴をとても見事に
 手で押したり引いたりして
 梭をたていと経の間を行き来させるとき、近くに保つ
 胸の近くに、そのようにオデュッセウスは近くを走つた、
 そして後から
 足跡を足で踏んだ埃が上がる前に、
 そして彼の頭の上に神のようなオデュッセウスは息を吐
 きかけた
 絶えず速く走つて、するとさらに全てのアカハイア人ら
 は叫んだ
 勝利を熱望する彼に、全速力を上げているものに彼らは
 大いに叫んだ
 だがまさにコースの最後に彼らがかかった時、忽ちオデ
 ュッセウスは
 燦めく眼のアテヘーネーに彼の心の中で祈つた、
 「聴いて下さい、女神よ、善いあなたは私の足のために救
 い手として来て下さい。」
 このように祈つて言った、すると彼の言葉をパルラス＝
 アテヘーネーが聴いた、

770

765

760

そして四肢を軽くなされた、両足も上の方の両手も。

そして彼らが今にも賞を得むと突進しようとしたとき、

その時アイアースが走っていて足を滑らせた。アテハ

ーネーが躓かせたから

その所で牛が殺されながらもつもう啼いて糞をひったのだった、

その牛たちをパトロクロスの供養のために足の速いアキ

ヒルレウスが殺した、

それで牛の糞で口も鼻も一杯になった、

クレールの方は神のような我慢強いオデュッセウス
が取り上げた、

一着で着いたから、そして彼は牛をとった輝けるアイア

ースは。

そして野生の牛の角を手握って立った、

糞を拭い取りながら、アルゴス人らの中で言った、

「おお何たることだ、女神が私を足を滑らせたのか、この

女神は昔から

母親のようにオデュッセウスに寄り添っているそして助け
る。」

このように言った、すると彼ら皆は彼に向かって愉快

に笑った。

そしてアンティロコホスが最尾賞を持ち運んだ

笑いながら、そして言葉をアルゴス人らの中で言った、

785

780

775

「よく御存知のあなた方皆さんに私は言う、親しい方々よ、

今もまた

不死なるものらは年長の人々を賞したのだ。

というのはアイアースは私より少し先に生まれたのだが、
だがこの人は過去の世代に属し、過去の人々に属する、

彼を屈強な年寄と人々は言う、不可能だ

アカハイア人らにとって足で競うことは、アキヒルレウス

以外には、

このように言った、そして足の速いペーレイオンを

敬った。

すると彼にアキヒルレウスが言葉で答えて言い掛けた、

「アンティロコホスよ、お前の褒め言葉は空しくは発せら

れなかった、

いや君に半タラントの金を私は追加して差し上げよう。」

このように言って手に渡す、すると彼は喜んで受け取
った。

それからペーレイデースは長く影を引く槍を

持ち出して競技場に置いた、また楯と四つ角の兜を置い
た、

サルペードーンの武具を、これらを彼からパトロクロス

が剥いだ。

そして真直ぐに起って言葉をアルゴス人らの中で言っ
た、

800

795

790

「二人の男をこれらを回って喚ぼう、最も強い二人を、
武器を身につけて、肉を切り刻む青銅を手持って、
お互いに進み出て合戦を試みるのだ。」

二人のうち先に美しい膚を突いたもの、
鎧を掻い潜って内蔵と黒い血に触れたもの、

そのものに私はこの銀の象嵌のある剣を進呈しよう
美しいトホレイケー製の、これをアステロパイオスか
ら私が奪った、

そしてこれらの武器を二人のために同じに分けて持って
行かせるように、

そして彼らのために素晴らしい御馳走を幕舎の中で供し
よう。」

このように言った、するとその時大きいテラモーンの
アイアースが起った、

そしてテューデイデースが立ち上った、強力なディオメ
ーデースが、

彼らは群衆のそれぞれの側で武装してから、
二人とも真中に歩み寄った戦わんと気負い立って、

恐しく睨み付けながら、全てのアカハイア人らを驚きが
捉えた。

そしてお互いに向って歩んで近くに来たとき、
三度彼らは襲いかかり、そして三度近くから切り結んだ。

その時それからアイアースがあらゆる方向に均衡のとれ

た楯の上から
突いた、だが皮膚に届かなかった、内側で鎧が護ったか
ら、

そしてテューデイデースが大きな楯越しに
首を輝く槍の穂先で絶えず突き捲った。

それでその時だアカハイア人らはアイアースのために恐
れて

中止して賞を等しく分けるように命じた。
だがテューデイデースに勇者は大きな剣を与えた
さやとよく造られた吊り帯と一緒に持って来て。

それからペーレイデースは溶鉱炉から取出されたまま
の鉄塊を置いた、

それを以前に大いなるエーエティオンの力が投げたも
のだ、

だがその彼を足の速い神のようなアキヒルレウスが殺し
た、

そしてそれを船に積んで持って来た他の財宝と共に。
そして真直ぐに立ったそしてアルゴス人らの中で言葉を
言った、

「この賞を試みる者らは起ちなさい。
よしんば彼の肥沃な土地が大層離れていても、

それを五つの回る年ほど保ち続けるだろう
それを使用して、というのは彼にとって鉄に事欠かない

それを五つの回る年ほど保ち続けるだろう
それを使用して、というのは彼にとって鉄に事欠かない

だろつから

羊飼いたちも鋤使いたちも町ガイヌに行かないだろつ、いやこ
れが補つだろつ。」

このように言つた、するとその時立ち上つた戦さに勇
気のあるポリュポイテースが、

それから立ち上つた神に等しいレオンテウスの強い力が、
そして立ち上つたテラモーニアデースのアイアースと神
のようなエペイオスが

そして順番に立つた、そして鉄塊を掴んだ神のようなエ
ペイオスが、

そして振り回して投げた、するとそれを見て全てのアカ
ハイア人らは笑つた。

その次には又レオンテウスが投げ飛ばした、アレースの
枝分れが

三番目に又大きいテラモーンのアイアースが抛つた、
頑丈な腕から、そして全ての印を超えて飛ばした。

だが戦さに勇氣あるポリュポイテースが鉄塊を掴んだ時、
一人の牛飼いの男が杖を投げる程に、

そして杖はぐるぐる廻りながら群れ牛を越えて飛ぶ、
それ程全ての競技者を越えて投げた、すると彼らは喝采
した。

そして強力なポリュポイテースの仲間仲間は立ち上つて
割つた船のところに王の賞を運んだ。

835

今度は彼は弓使いたちのために董色の鉄を置いた、

そして下に置いた十挺の両刃の斧と十挺の片刃の斧とを、
そしてコバルト色に触先を塗つた船の帆柱を立てた

遥かな砂の上に、そしてそれに臆病な鳩を
細い紐で脚を結んだ、そしてそれをこそ命じた

射るように、「臆病な鳩を射たものは、
両刃の斧をすつかり取り上げて家へ持ち帰るが好い、

鳥はずしたが、紐を射たものは、

より劣つているのだから、彼は片刃の斧を運ぶだろつ。」
このように言つた、するとその時主テウクロスの力が

立ち上つた、
またメーリオネースが立つた、イードメネウスのよい従

者。
籬を青銅の兜の中にいれ手で持つて揺すつた、
するとテウクロスが真先に籬を当てた、忽ち矢を

力を籠めて放つた、だが主に誓わなかつた
羊の初仔によつてしかるべき犠牲を執り行うことを。

鳥は外した、というのはアポルローンがそれを彼に望ま
なかつたから、

だが彼は紐を脚のそばで射た、その紐で鳥は繫つてい
た、
そしてすつぱりと鋭い矢は紐を切つた。

鳩はその時天に向つて飛び、そしてそれは垂れた

850

840

845

860

865

855

紐は地に向つて、するとアカハイア人らは叫んだ。すると急いでメーリオネースは手から引つた。弓を、そして矢を長い間番えていた、狙つている間。そして直ちに遠矢を射るアポローンに誓つた、羊の初仔によつてしかるべき犠牲を執り行うことを。そして高く雲の下に彼は臆病な鳩を見た。そこで彼は旋回している鳥を翼の下で真中を射た、ずぶずぶと矢は突き抜けた、そして矢は地面に戻つて来ると、メーリオネースの足の前に刺さつた、そして鳥はコバルト色に触先を塗つた船のマストの上に乗つて首を垂らした、分厚い翼がだらりと下つた。そして急速に身体から命が飛び去つた、そしてそこから遠くに落ちた、人々は又びつくりして見詰め驚きに打たれた。するとメーリオネースは十挺の両刃の斧を全て取り上げた、そしてテウクロスは片刃の斧を中空の船に運んだ。するとペーレイデースは長く影を引く槍を置いた、まだ火に掛けていない釜を、一頭の牛の値の、花模様のもので、ついでに、競技場に運んで来て置いた、すると投げ手の男たちが立ち上つた、

885

880

875

870

立ち上つたアトレイデースは汎に統治するアガメムノンが、立ち上つたメーリオネースが、強いイードメネウスの従者が。すると彼らに話しかけた足の速い神のようなアキヒルレウスが、
「アトレイデースよ、我々は知つているからどんなに全ての中であなたが優れているかを、そしてどんなに力に於てまた投擲において最も優れているかを、
さああなたはこの賞品を持って中空の船に行つて下さい、そして槍は勇者メーリオネースに与えよう、
もしあなたがあなたの心に望むなら、私の方はそうしたい。」
こう言つた、すると兵士らの長アガメムノンは拒まなかつた、
そして彼はメーリオネースに青銅の槍を与えた、すると彼勇者は
伝令使タルテヒュピオスにとても素晴らしい賞を渡したのだつた。

895

890

第二十四の歌

さて競技会は解散された、人々はそれぞれ速い船の所へ

分れ分れに行つた。彼らは食事のことを想い
甘い睡りを楽しむことを想つた、だがアキヒルレウスは
愛しい友のことを想つて泣いていた、彼を睡りは
全てを従える睡りは捉えなかつた、そしてあちらこちら
と逍遙した、

パトロクロスの男らしさを強い力を懐かしんで、
そして彼と一緒にしたことの全て蒙つた苦しみの全て、
男たちの戦い通り抜けた苦しい波、

それらを想い出しては大粒の涙を流した、
あるいは横に寝そべり、あるいはまた

仰向けに、あるいは俯せに、それから真直ぐに立つて
海の岸を心もうつるに歩き回つた、しかし彼を曙は
海と岸との上に輝き渡つた曙は見逃さなかつた。

すると彼は戦車に迅い馬たちを繋いでから、
ヘクトールを引摺るために台車の後に結びつけた、
そして三度死んだメノイティアデースの臺の周りを引摺
つてから

再び幕舎の中で休んだ、そして彼をはそのまににした
埃の中に俯せのまま、するとその彼をアポロロンが

15

10

5

男を憐れんすべて相応しからぬものを身体から払い除
けた

死んではいたが、そして山羊皮楯^{アイギス}で全てを覆つた
金色の山羊皮楯で、彼を引摺り廻して壊さないように。

このように神のようなヘクトールを憤懣のあまり辱め
た、

だが彼を祝福された神々は見て憐れんだ、
そして鋭い眼をしたアルゲイポホンテースを焚付けた秘
かに隠すように。

その時他の皆には喜ばれた、だが決してヘーレーに
ポセイダーオンにそして燦めく眼の娘に喜ばれなかつ
た、

いや考えを変えなかつた最初に彼らに憎まれたまに聖
なるイーリオスが

そしてプリアモスがそして人々がアレクサンドロスの血
迷いの所為で、

彼は女神らを辱めた、女神らが彼の羊小屋に来たときに、
そして彼女を讃えた彼に悔いの多い肉欲を持つて来た彼
女を。

だがそれから十二番目の曙が来たとき、
その時不死なるものらに言つたポホイボス^{アポロロン}

が、
「あなた方は残酷だ、神々よ、禍々しいものらよ、一体か

30

25

20

つてあなた方に

ヘクトールは牛や完璧な山羊の腿骨を燃やさなかつたのですか？

その彼を屍になつた彼を今敢えて救おうとしない、

見ている彼の妻のためにそして母のためにそして彼の子供ののために

そして父のプリアモスのためにまた人々のために、彼らは彼を忍ぢ

火に燃やすであろうにそして副葬品を添えて葬るであらうに。

だがその破壊的なアキヒレウスに、神々よ、あなた方は加勢しようとなさる、

彼の心は相応しくないし彼の性格は胸の中で撓めがたい、ライオンのように獷猛である、

ライオンは大きい力と男らしい心になつて、衝き動かされて人間の羊群に向つて行く、食事を得るために、

そのようにアキヒレウスは憐れみをかなぐり捨てている、

彼には恥も

ない、恥は人々をひどく傷つけるがまた役にも立つ。

人は他にもっと親しいものをさえ失うことがあるだらう、同腹の兄弟をとか息子をとか、

だが泣いた後に嘆いた後に彼は止むものだ、

45

40

35

というのはモイラ^{運命}たちは我慢強い心を人間どもに持たせたから。

それなのに彼は神のようなヘクトールを、その命を奪つてから、

戦車に繋いで自分の戦友の墓の周りを引摺り廻している、彼にとつてそれがより美しいことでも得なことでもないのに。

彼はいい奴だが我々が彼を怒ることがないように、

というのは感覚のない土くれを痛めつけているのだから、怒つたあまりに、

すると彼に怒りを発して語りかけた白い腕のヘーレーが、

「これがお前の言葉でありうるのか、銀の弓を持つものよ、そもそもアキヒレウスとヘクトールと同じ名譽をあなたが置くなどということが。」

ヘクトールは死すべきもので人間の女の胸に置かれた、だがアキヒレウスは女神からの生れだ、その女神を私自身

が

育みそして成長させて人間の男に妻として与えた、ペーレウスに、彼は心に愛しいものであつた不死なるもの

のらに。

そしてあなた方皆は出席した、神々よ、結婚式に、そしてその中にお前も

60

55

50

御馳走になった豎琴を手にして、邪悪なるものよ、常に
信なきものよ。」

すると彼女に答えて言った黒雲を集めるゼウスが、
「ヘーレーよ、全く以て神々に怒ってはならない、
というのは誉れは一つではないだろうから、いやヘクト
ールだって

神々には最も愛しいものだイーリオスにある死すべきも
のらの中で

私にとつてもそつだ、素敵な贈物を欠かしたことがない
から。

というのはかつて私の祭壇は適切な御馳走を欠かしたこ
とがないから、

液のと煙のと、それを我々が供物として得たのだから。
だが盗み出すことは止めようよ、どうも宜しくない

アキヒルレウスの目を盗んで屈強なヘクトールを盗み出す
ことは、というのは彼にいつも

母親が夜となく晝となく付き添っている。

だが神々のうちの誰かがテヘティスを私の近くに呼んで
くれないかな、

何か彼女に賢い言葉を私が言おうため、つまりアキヒルレ
ウスが

ブリアモスから贈物を受け取ってそしてヘクトールを解

75

放するようにな。」

このように言った、すると嵐の足のイーリスが使いに
立ち上った、

そしてサモスと巖の多いイムボロスとの中間で
暗い海に跳び込んだ、すると海がざざと鳴った。

そして彼女は鉛の錘のように海の深みに分け入った、
その錘は野に住む牛の角に付けられて

生き餌を食つる魚らに死を齎さんとして行く。
そして抉られた洞穴の中にテヘティスを見付けた、そし
てその周りに他の

海の女神らが集まって坐っていた、そして彼女は真中で
彼女の批の打ち所のない息子の定めを嘆いていた、彼は

彼女の嘆くには
肥沃なトロイエーで死ぬであるつ、父から遠く離れて。
さてそばに立って語りかけた足の速いイーリスが、

「立ちなさい、テヘティスよ、不滅の企みを知っているぜ
ウスが呼んでいます。」

すると彼女に答えたその時銀の足の女神テヘティスが、
「一体何故私をあの大なる神と呼び出される？ 私は恥じ

不死なるものらの間に行くことを、私は心に終りのない
苦しみを持っている。

でも行きます、言葉を無にしてはならない、彼が言うか

90

70

85

65

80

ぎりの。」

このように言つて女神らの中の女神は頭覆いをかぶつた

黒い頭覆いを、それよりも黒い着物はなかった。

そして出掛けて行つた、すると前を風の足の迅いイー

スが

導いた、彼女らの周りで海の波が道を開いた。

二人は岬に登りそして空に翔び上つた、

そして広く声の届くクロニデーヌを見出した、周りには

他の全ての

祝福されたる常に居ます神々が集まつて坐っていた。

そこで彼女は父ゼウスの傍に坐つた、アテヘーネーが席

を譲つた。

するとヘーレーが金の美しい杯を手へ渡した

そして言葉で歓迎した、するとテヘティスは飲んで返し

た。

そこで彼らに言葉を始めた人間と神々との父が、

「お前はウーリュムボスに來た、女神テヘティスよ、悲し

んでいるにも関わらず、

心の中に忘れ難い悲しみを持ちながら、私といえどもそ

れは知っている、

だが敢えてこう言うぞそのためにお前をここに呼んだの

だ。

105

100

95

九日間も争いが不死なるものらの間に起つている

ヘクトールの屍と都市の略奪者アキヒルレウスとをめぐつ

て、

そして彼らは鋭い目をしたアルゲイボ^{アル}ホ^コンテ^スに秘か

に隠すよう焚付けている、

だが私はこの譽れをアキヒルレウスに付与しよう、

お前の尊敬と愛とを後々に保ちたいから。

大急ぎで陣営に行きなさいそしてお前の息子に命じな

さい、

神々が彼に怒っていると叫びなさい、全ての中でもとり

わけ私が

全ての不死なるものらの中で怒っていると、つまり狂つ

た心で

ヘクトールを嘴のある船の傍らに留めて返さないことを、

どうか私を畏れるようにそしてヘクトールを返すように。

一方私も心の大きいプリアモスにイーリスを派遣しよう

愛しい息子を贖うように、アカハイア人らの船に行つて、

そして贈物をアキヒルレウスに持つて行くように、それら

は心を喜ばすような。」

このように言つた、すると銀の足の女神テヘティスに

否やはなかった、

そしてウーリュムボスの嶺から飛び立って行つた、

そして彼女の息子の幕舎に來た、そこに彼を

120

115

110

見出したひどく悲しんでいるのを、周りでは彼の親しい友たちが

大急ぎで立ち働き朝食の準備をしていた、
彼らのために羊毛で覆われた大きい羊が幕舎の中で殺された。

そこで彼女は彼のすぐ近くに坐った尊い母は、
手で彼を撫でながら言葉を言い名前を呼んだ、
「私の子供よ、何時まで泣き悲しんで

お前の心を食べるのだい、食べ物のことも考えない
臥床のことも考えないで？ いいことだよ女と愛の中で
交わることは、というのと思うにお前は長く生きないだ
ろうから、いやすでにお前の

近くに寄り添っている死と強力な運命^{モイラ}とが。
だが私の言うことを直ぐに聴きなさい、私はゼウスから
あなたへの使者です、

彼は神々があなたに怒っていると言う、そして皆の中で
彼が最も

全ての不死なるものらの中で怒っていると、つまり狂し
た心で
ヘクトールを触先の尖った船に留めて返さないから。

さあ返しなさい、そして死骸の償いを受け取りなさい。
すると彼女に答えて語りかけた足の速いアキヒルレウス
が、

135

130

125

「そのようになりませうように、償いを持って来たものが屍
を持ち帰るように、

もし本当に考え深いお心でオリュムポスなる人その人が
お命じなら。」
このように彼らは船のアゴラで母と子とは

お互いに翼のある多くの言葉を語り合っていた。
さてクロニデースはイーリスを行かせた聖なるイーリオ
スに、

「さあ行け、速いイーリスよ、ウーリュムポスの住いを離
れて
イーリオスに入って心の大きいプリアモスに伝えなさい
アカハイア人らの船陣に出向いて愛しい息子を返して貰
うように、

アキヒルレウスに贈物を持って行くように、それは心を喜
ばすだろう、

独りで、トロイア人らの他のどの男も一緒に行かぬが好
い。
誰か年取った伝令が一人彼に従うと好い、彼は真直ぐ向
けるように

驟馬とよく造られた車とを、そしてまた帰りには
屍を町に持ち帰るように、その彼を神のようなアキヒルレ
ウスが殺したのだ。

死のことが決して彼に気掛かりでないようにせよ怖れも

150

145

140

だ、
というのはそのように彼に護衛アルゲイボステースを
行かせようから、

彼は導いてアキヒレウスの許に行き着くまで導くである
う。

そしてアキヒレウスの幕舎に導き入れたならば、
彼自身も殺すまいし他の皆をも控えさせるだろつ、

というのは彼は智慧がないので目が見えないので罪
深いのもないのだから、

いや大いに親切に嘆願する男を護るであらう。」
このように言った、すると嵐の足のイーリスは使いを

するべく急いだ。

そしてプリアモスの家に来た、そして悲嘆と慟哭とに来
合わせた。

子供たちは父を取り巻いて中庭に坐って

涙で着物を濡らしていた、彼は老人は真中で
しっかりとマントにくるまって、そして沢山の

あくたがこの老人の頭や首にあつた、

それを転げ廻りつつ彼の手で集めたのだった。

そして娘たちと嫁たちとが家の中じゅうで泣き叫んでい
た、

大勢で豪勇であつた彼らを思い出して

アルゴス人らの手で命を奪われて倒れている彼らを。

165

160

155

さてプリアモスの傍らに立つたゼウスの使いは、そして
話しかけた

そおつと声を出して、すると慄えが彼を四肢を捉えた

「心に勇氣を持って、ダルダニテースのプリアモスよ、恐れ
てはならない、

というのは私はお前にひどいことを予言しにここへ来た
のではないから、

いやよいことを考えて来たのです、私はゼウスからあな
たへの使者です、

その神はあなたから遠くに居て大いに心に掛けそして憐
れんでいます。

オリュムポスなる神はあなたが神のようなヘクトールを
贖い戻すことを命じられる、

そして贈物をアキヒレウスに持って行くように、心を喜
ばすような、

独りで行きなさい、トロイア人らの他のどの男も一緒に
行かないように。

誰か年取つた伝令使が一人お前に従つとよい、彼は真直
ぐに向けるように

驟馬とよく造られた車とを、そしてまた帰りには
屍を町に持ち帰るように、その彼を神のようなアキヒル
ウスが殺した。

死のことが決してお前に気掛かりでないようにせよ怖れ

180

175

170

もだ、

というのはそのようにお前と一緒に護衛アルケイボスアルケイボスン

テースを行かせようから、

彼はお前を導いてアキヒレウスの許に到るまで導くだろう。

そして彼がアキヒレウスの幕舎に導き入れたならば、

彼自身も殺すまいし他の皆をも控えさせるだろう、

というのは彼は智慧がないので目が見えないので罪

深いでもないのだから、

いや大いに親切に嘆願する男を護るであらう。」

彼女はこのように言うと言ち去った足の速いイーリス

は、

すると彼は息子たちによく走る驟馬の引く車を

準備するよう命じたそしてそれには籠を結びつけるよう

命じた。

そして自分はおくわしい宝の部屋に降りて行った

柏檜ひやくんの香りのする屋根の高い部屋に、それは沢山の宝石

を蔵していた、

そして妻のヘカペーを呼び寄せて言った、

「不幸な人よ、オリュムピアなるゼウスから私に使者が来

た

愛しい息子を贖い戻せというのだアカハイア人らの船陣

に行つて、

195

190

そしてアキヒルレウスに贈物を持って行けと言つ、心を喜

ばず贈物を。

だがさあ私に言つてくれ、お前の心にどんな風に見える

か？

というのはひどく心と気持ちとは私自身に命じるのだ

あそこへ、アカハイア人らの広汎な陣営の中へ船のとこ

ろへ行くことを。」

このように言つた、すると女は泣きだしたそして言葉

で答えた、

「まあ、どこへあなたの分別は行ってしまったの、それで

もつてこれまでは

客人たちにもあなたが治めている人々にもあなたが有名

であつた？

どうしてアカハイア人らの船に独りで行こうと思われる

のですか、

あの男の両眼の中に彼はあなたの大勢のそして強い

息子たちを殺した、本当にあなたの心は鉄で出来ている。

というのはもし彼があなたを捕えそして両眼で見ような

ら、

彼は残忍な不誠実な男ですから、あなたを憐れまないで

しょう、

また少しもあなたを敬わないでしよう。ですから今は遠

くから哭みましょう

185

205

200

邸に坐つて、そのようにかつて強力なモイラ^{運命}が生れながらにして絲を紡いだのです、彼をこの私が生んだとき、

足の速い犬たちを飽かせるように彼の両親から遠くで、強い男の傍らで、そいつの肝臓の真中に私は

喰い付いて食つてやりたい、そうすれば仕返しになるだらう

私の子供の、卑怯に振舞つてゐる彼を彼は殺したのではないから、

いえトロイア人らと深い胸のトロイア女らとのために立つた彼を殺したのです、逃げること尻込みすることを

考えてゐる彼を殺したのでもない。」

すると彼女に再び答えた老人神に似たプリアモスが、

「行きたいと思つてゐる私を引き止めるな、またお前自身が私にとつての

悪い鳥であるな宮殿の中で、あなたは私を説得できないだらう。

とつては地上の他の誰かが命じたのなら、

あるいは犠牲のことに詳しい予言者あるいは祭司であるものらが、

我らは偽りだと思つたらうそしてむしろそつばを向くだらう、

ところが今の場合は私自身が神から聴いたのだからそし

220

215

210

て顔を見たのだから、

私は行く、そして言葉は空しくないだらう。そして私のアイサ^{アイサ}が

青銅の鎧を着たアカハイア人らの船の傍らで死ぬことだ

としたら、

望むところだ、つまり直ちにアキヒルレウスは私を殺した

らよ、
両腕で私の息子を抱いた私を、思つ存分泣き泣いた後な

らよ、
と言つた、そして美しい函の蓋を取つた、

中から十二枚のとても美しいペプロス^{襦袢}を取出した、

そして十二着の一種の外着を、そして同数の毛布を、
ツイス、

そして同数の白いマントを、そしてその他に同数の長着

を、
そして金のタラントを全部で十箇計つて運んだ、

そして輝く二つの鼎を、そして四つの釜を、

またとても美しい盃を、それを彼にトロレーキエーの男

らが呉れた

使節として行つた彼に、大きな財産を、今はそれをも

老人は家に取つて置かなかつた、そして大層心に望んだ

愛する息子を贖戻すことを。そして彼はすべてのトロ

イア人らを
回廊から追い出した恥かしめの言葉で辱めながら、

235

230

225

「行け、恥すべき役立たず共、一体お前たちには
家に嘆きが無いのか、私に面倒を掛けに来るとは？」

お前たちは軽く見るのか私にクロニデースのゼウスが苦
しみを与えたことを、

最も秀でた息子を殺して？　だがお前らも思い知るだろ
う、

というのはずつと容易になったのだお前らはアカハイア
人らにとつて

殺すのが彼が死んだので。だが私は
市が破壊され略奪されるのを

両眼で見る前に、アイデースの家に行きたいものだ。」

こう言った、そして標の杖で男たちに指図した、する
と彼らは外に出た

老人が激怒しているので、それから彼は彼の息子たちに
命じた、

叱責しながらヘレノスとパリスと神のようなアガトーン
と

パムモンとアンティポホノスと雄叫び勇ましいポリテ
ースと

デーイポホボスとヒツポトホオスと高貴なディーオスと
に、

彼ら九人に老いた彼は叱責しながら命じた、
「ほら急げ、駄目な子供たち、恥さらしらよ、皆一緒にお

250

240

前たちは

ヘクトールの代りに迅い船の所で殺されると良かった。

ああ何と私はどこからどこまで不運なのだ、最も優れた

息子たちを生みながら

肥沃なトロイエーで、その中の一人も思うに残されてい
ない、

神に匹敵するメーストルも戦車で戦つトロイロスも
ヘクトールも、彼は人間の間で神であった、似ていなか
った

死すべき人間の子供であるのに、いや神の子に似ていた。
彼らをアレースが殺した、そしてこれらの批難に値する

ものらが皆残った、
嘘吐きと踊り手、踊っていて地面を叩くことでは最も優
れている者たち、

仔羊らや仔山羊らを味方から盗む泥棒、
私の車を早く準備しないか？

そしてこれらをすべて上に積まないか、私が道を進もう
ために？」

このように言った、すると彼らは父の叱責に恐れをな
して

騾馬用のよく走る車を引き出した
美しい造り立ての、そして柳の籠をそれに結え付けた、

そして釘から騾馬用の軛を外して降ろした

265

260

255

柘植製の突起のある、手綱通しがびつたりと附いている。

そして軛と一緒に九ペーキユスの軛結びを運び出す。

そしてそれをよく削られた轅の下にしつかりと置いた、

そのとつばなに、そして輪を爪に投げ掛けた、

そして三度両側から突起に結びつけた、そしてそれから

すじょう良く結んだ、そして紐の端を下に折り曲げた。

そして宝庫からよく削られた四輪馬車の上に運んで

ヘクトールの首の数え切れない償いを積み上げた、

そして驟馬たちに軛をつけた力強い蹄の馬具を着けて働

く驟馬たちに、

それらをかつてプリアモスにミュシア人らが呉れた輝け

る贈物として。

そしてプリアモスの馬たちを軛の下に導いた、その馬た

ちを老人は

自分で飼ってよく磨かれた厩で育てていた。

二人は棟高い家の中で軛を置いていた

伝令使とプリアモスとは、心に深い智略を置きながら、

すると彼らの近くにやって来たヘカペーが心に悲しみな

がら、

心を蜜にする酒を右の手に持って、

金の杯に、灌酒してから二人が出掛けるように、

そして馬たちの前に立って言葉を言い名前を呼んだ、

「さあ、父ゼウスに灌酒なさい、そして家に帰れるように

270

祈りなさい

敵の男たちから戻って、心があなたを

船に駆り立てるので、私の心は望まないのですが、

ですがあなたはこれから黒雲を集めるクロニオンに祈

りなさい

イーダーに居られる方に、その神は全トロイエーを見そ

なわず、

そして鳥を乞いなさい、速い使者を、それは彼自身に

鳥たちの中で最もお気に入り、そしてゼウスの最も大き

な力である、

右手に、あなた自身がその鳥を両眼で視て

それに力を得て速い駒を保つダナイイラの船に行かれる

ように。

だがもしあなたに彼の使者をよくご覧のゼウスが与えな

いなら、

その時は私は勇気を奮ってあなたにお願ひします

アルゴス人らの船に行かないように大層御執心だけれど

も。」

すると彼女に答えて神に似たプリアモスが語りかけ

た

「おお妻よそのように指図するお前を私は無下にはしな

い、

というのはゼウスに両手を挙げるのはいいことだから、

290

295

285

280

275

300

彼は哀れんでくれるだろう。」

このように言った、そして老人は侍女に命じた

手に汚れてない水を注ぐように、すると彼女は傍らに

立った

手洗い器と水差しとを両手に持って。

すると手を洗ってから彼は彼の妻から杯を受け取った、

それから祈った屋敷の真中に立って、そして酒を零した

空を仰いで、そして言葉を声に出して言った、

「父なるゼウスよ、イーデーから治めておられる、最も力

あり最も大きい、

私が愛されるものとして哀れまれるものとしてアキヒルレ

ウスのところに着けますように、

そして鳥を送って下さい、速い使者を、それがあなた自

身にとつて

鳥の中で一番愛しい、そして鳥の力において最も大きい、

右手に、私自身がそれを両眼で見て

それに力を得て速い駒を駆るダナイオイラの船に行くよう

に。」

このように祈って言った、すると彼の言葉を助言者ゼ

ウスが聴き給った。そしてたちまち鷲を遣わした、翼あるものの中で最も

確かなものを、

黒い狩人を、彼を黒またらと人々は呼ぶ。

315

310

305

そして高い屋根の宝庫の扉がその位である如く

富裕な男の、門がよく備わっている、

その位その両方の翼はあつた、そして彼らに見えた

右側に町を横切つて飛んで、すると彼らを見て

喜んだ、そしてすべての胸の中で心は喜んだ。

それで急いで老人は彼の戦車に乗った、

そして玄関からこだまするポルティコから乗り出した。

前には驟馬達が四輪の車を曳いた、

その驟馬たちを賢明なるイーダイオスが駆った、そして

その後ろから

馬たちが、その馬たちを老人が鞭で駆って走らせた

迅速に町を通り抜けて、そしてすべて親しい者らは従っ

た

大いに泣きながらあたかも死に行く人を送ることく。

そして彼らが市から下つて行って、平原に去つて行くと、

すると彼らはイーリオスに向つて帰つて行った、

子供たちと婿たちとは、そして二人をは広く声の届くゼ

ウスが忘れなかつた

平原に現れた二人をは、そして見て老人を憐れんだ、

そして忽ちヘルメスに、愛しい息子に、向つて言った、

「ヘルメスよ、お前にとつて何よりも最も好ましいのだから

あの人と一緒に行くことが、そしてお前が心に掛けてい

330

325

320

る者の言葉を聞くのだから、

さあ行きなさい、そしてプリアモスをアカハイア人らの
中空の船のところへ

このように導きなさい、誰もが見ないように誰もが気付
かないように

他のダナオイラの中の、ペーレイオーンのもとに着くま
では。」

このように言った、すると従わずにはいなくなつた走り
手アルゴス殺しは、

そして直ちに足の下に美しいサンダルを結びつけた
神のものなる金のサンダルを、それは彼を運んだ海の上

へも
また無限の陸地の上をも風の息とともに、

そして彼は杖を握つた、それでいて人々の眼に魔法をか
ける

彼が望む人々の眼に、そして又眠っているものらを目覚
めさせる、

その杖を手持って強いアルゲイボホテス^線は飛んだ。
そして忽ちにトロイエーとヘルレスポントスに着いた、

そして青年の王子に似せて歩いて行つた、
口髭を生やしたばかりの、その若さは最も優美である。

さて彼らはイーロス^線の大きな塚を通つたとき、
彼らは驟馬たちと馬たちとを停めた、水を飼つたために、

350

345

340

355

川で、というのは今や夕やみが地上に来ていたので。

その時彼をすぐ近くに伝令使が見て気付いた
ヘルメイエースを、そしてプリアモスに向つて言葉を発
して言った。

「言つて下さい、ダルダニースよ、用心深さは心の仕事
です。」

男を私は見る、そしてすぐに私らは木つ端みじんにされ
ると思う。

さあ戦車に乗つて逃げましょう、またはせめて彼を
膝を掴んで哀願しましょう、そうすれば憐れんでくれる
でしょう。」

このように言った、すると老人の心は動顛した、そし
て彼はひどく恐れれた、

屈曲する四肢に生えたる毛が真上に立ち上がった、
そして杲然と立ち盡した、すると彼は救助者は近くに來
た、

老人の手を取つて訊ねそして語りかけた、
「何処に、お父つぁんよ、こんなにして馬たちと驟馬たち
とを連れて行くのですか

神のものなる夜を貫いて、他の死すべきものらが眠つて
いるときに？」

あなたは恐れないのですか怒気を呼吸しているアカハイ
ア人らを、

360

355

彼らあなたの敵であり芳しくないものらが近くににいるの
に？

彼らの誰かがもし知つたなら早い暗い闇を貫いて
そんないいものを運んでいるあなたを、あなたの心はど
んななのですか？

あなた自身も若くはない、あなたに従っているこの人も
老人だ、

男を防ぐのには、誰かがわけもなく暴力をふるつたなら、
だが私は何もあなたに悪いことをしない、そして他の者
らをも

あなたに近付けないようにしましょう、あなたは私の父
に似ています。」

すると今度は彼に答えた老人神に似たプリアモスが、
「確かにその通りだ、愛しい子よ、お前が言う通りに、
しかしそれでも神々の中のどなたかが私に手を差し伸べ
て下さる、

その神はこのような歩行者を私に出遭つように遣わされ
る、

吉祥として、全くそのようにあなたは体形も容貌も素晴
らしい。

考えも優れている、祝福された両親から生まれたのでし
ょう。」

すると彼に再び答えた走り手アルゲイポホンテース

365

が

「確かにこれら全てを、御老人よ、理モロになつて言われた
ですがさあ私にこのことを言つて下さいそして正確に話
して下さい、

あなたは多くの素晴らしい宝を運んで行くのですか

外国人のところに、それらがあなたのために安全に保た
れるように、

それともあなた方皆は聖なるイーリオスを放棄したので
すか

恐れをなして、つまりあのように最も優れた男が殺され
たから

あなたの息子が、というのはい少しもアカハイア人らの戦
に引けを取らなかつたのだから。」

すると今度は彼に答えた老人神のよつなプリアモス
が

「あなたはどなたですか、優れた人よ、どのような御両親
からお生まれだ？

そのようにふさわしく私の不運な子供の運オイトスを話されるの
は。」

すると今度は彼に走り手アルゲイポホンテースシが語つ
た

「私を試しておられる、御老体、そして神のようなヘクト
ールについて質問しておられる。」

375

370

385

380

390

彼を私は何度も男が誉れを受ける戦さで

両の眼で見ました、あの時こそ船陣に追いつめて

アルゴス人らを殺したその時に、鋭い青銅で引き裂いて、

私たちはというと立つて驚嘆していました、というのはアキヒレウスが

戦うことを許さなかったから、アトレイオンに怒って。つまり私は彼の従者です、一つのよく作られた船が運んで来た、

私はミユルミドーン人の一人で、私の父はポリュクトールです。

裕福で彼はあり、あなたがそのようである老人です、六人の子息が彼にはいましたが、私は七番目です、彼らと籤を引いて籤で私がここに従軍することになりました。

そして今私は船から平原にやって来ました、というのは^{まなこ}曙に

眼擦めくアカハイア人らは町をめぐって戦さを仕掛ける

だろうから。というのは彼らは坐っているのうんざりしている、そして出来ない

熱心な彼らを戦さから抑えることはアカハイア人らの王「ら。」

400

395

すると今度は彼に答えた老人神に似るプリアモスが、

「もしペーレーイアテースのアキヒレウスの従者で

あなたがあののなら、さあ私に全ての真実を語って下さい、

まだ船の傍らに私の子供は居るのですか、それとも彼をすでに

手足をちぎって彼の犬の前に置いたのかアキヒレウスは。」

すると彼にまた語りかけた走り手アルゲイボ^{ホル}ンテースが、

「老人よ、決して彼を犬たちは食べていない鳥たちも、まだ彼はアキヒレウスの船の傍らに横たわっている生前そのままに幕舎の中に、十一番目の曙だ横たわっている彼にとって、彼の肉は腐っていない、また彼を蛆たちが

食べていない、蛆たちは戦さで殺された男たちを食べ盡すのだが。」

実際彼を彼の大事な友の墓の周りに

情容赦もなく引きずります、聖なる曙が現れる度に、しかし彼を損ないはしません、いらっしやって御自分で

驚かれますように

どんなにみずみずしく彼が横たわっているか、彼の周りから血は洗い去られている、

415

410

405

どこにも汚れない、そして傷はすべてびつたり塞がっている、

傷つけられているかぎりの傷は、というのは青銅を彼らが駆つた傷が沢山彼の中にあつたから。

そのように祝福された神々はあなたの息子を気にかけて下さつた

屍ではあつたが、彼らに心の中で愛しかつたから。」

このように彼は言つた、すると老人は喜んだ、そして言葉で答えた、

「子供よ、実にいい事だそして相應しい贈り物を差し上げるべきだ

不死なるものらに、私の子供はかつてなかつた、生きていたときには、

屋敷で神々を忘れたことは、神々はオリュムポスを保たれる、

だから神々は憶い出された死の定めに遭つてさへ、さあこれを私から受け取つて下さい美しい杯を、

そしてこの私を護つて下さい、そして私を送つて下さい神々と共に、

ペーレイアデーアの幕舎に行き着くまで。」

すると彼に再び答えた走り手アルゲイポ^ホンテースが、

「私を試しておられる、御老人よ、私はより若い、私を

430

420

説き伏せることは出来ませんよ、

あなたは私にアキヒレウスを取り除けておいてあなたの贈り物を受けると命じられる。

だが彼を私は恐れますそして心から敬つております盗むには、私に禍が後に起こりはせぬかと。

だつたら私はあなたの案内人になつて名高いアルゴスマでも行きますよ、

注意深く速い船に乗つてなり徒歩でなりお供をして、誰もがああなたの案内人を見ては戦さを仕掛けませんよ。」

こう言つた、そして救助者は戦車に跳び乗り急いで鞭と手綱とを手を持った、

そして馬たちの内に騾馬たちの内に元気を吹き込んだ。そして船の壁と濠とのところに来たとき、

彼らは新たに夕飯をめぐつて見張りたちは忙しかつた、そこで彼らに睡りを注いだ走り手アルゲイポ^ホンテースは

皆に、そして忽ち門を開き門を外した、そしてプリアモスと車に積んだ輝かしい贈り物とを導き入れた。

そしてペーレイアデーアの幕舎に来た時

高い幕舎に、それをミユルミドーン^人らが王のために造つた

樅の材を切り出して、それから上に葺いた

450

445

440

435

湿地から刈り取った藁だった葦を、

そしてその間に彼のために大きい中庭を作った王のため
ぎつしりした杭で、一つの門の戸がついていた

縦の、それを三人のアカハイア人が閉めたものだが、

そして三人掛りで扉の大きな門を開け開けたものだが、

他の者らは、だがアキヒレウスは一人で開けたものだ、

その時誠にヘルメイアスは老人のためにそれを開けた、

そしてなうての贈物を運び込んだ足の速いペーレイオー

ンのために、

そして戦車から地面に降り立って言った、

「老人よ、全く私は不死なる神であってやって来たのでし

た、

ヘルメイアスです、つまりあなたのために私を父は一

緒に案内者として来させたのです。

ですがまさしく私は帰って行きましよう、アキヒレウス

の

視野の中へ行きますまい、批難に値することでありまし

よう

不死なる神がこのように大っぴらに死すべきものに肩入

れすることは、

あなたは入って行ってペーレイオンの膝に縋りなさい、

そして彼に父と髪の毛の美しい母に掛けて

嘆願しなさいそして子供に掛けて、あなたが彼の心を動

465

460

455

かすように。」

このように言つて大きなオリュムポスへ去つた

ヘルメイアスは、するとプリアモスは戦車から地面に

跳び降りた、

そしてイーダイモスをそこに残した、すると彼は控えて

留まつた

馬たちと驟馬たちとを、そして老人は真直ぐに家に向つ

た、

そこにゼウスが愛するアキヒレウスが坐っているのだ

た、そして彼その人を

見つけた、だが戦友らは離れて坐っていた、二人だけ、

勇者アウトメドーンとアルキモスと、アレースの岐れ、

仕えて忙しくしていた、たつた今食事を終えたので

食べて飲んで、食卓がそばにあった。

さて彼らに入つて行くのを見られなかつた偉大なるプリ

アモスは、そして近くに立つた

両手でアキヒレウスの膝に縋り手に接吻をした

恐ろしい男を殺す手に、その両腕が多くの彼の子息らを

殺したのだ。

恰も男を重い過ちが掴んだ時のように、彼は祖国で

人を殺して他の国へ逃れた、

富裕な人の家に、すると驚きが見る人々を捉える、

そのようにアキヒレウスは神に似るプリアモスを見て驚

480

475

470

もだ、

というのはそのようにお前と一緒に護衛アルケイポスアルケイポスン

テースを行かせようから、

彼はお前を導いてアキヒレウスの許に到るまで導くだろう。

そして彼がアキヒレウスの幕舎に導き入れたならば、

彼自身も殺すまいし他の皆をも控えさせるだろう、

というのは彼は智慧がないので目が見えないので罪

深いでもないのだから、

いや大いに親切に嘆願する男を護るであらう。」

彼女はこのように言うと言ち去った足の速いイーリス

は、

すると彼は息子たちによく走る驟馬の引く車を

準備するよう命じたそしてそれには籠を結びつけるよう

命じた。

そして自分はおくわしい宝の部屋に降りて行った

柏檣ひやくくわんの香りのする屋根の高い部屋に、それは沢山の寶石

を蔵していた、

そして妻のヘカペーを呼び寄せて言った、

「不幸な人よ、オリュムピアなるゼウスから私に使者が来

た

愛しい息子を贖い戻せというのだアカハイア人らの船陣

に行つて、

195

190

185

そしてアキヒルレウスに贈物を持って行けと言つ、心を喜

ばず贈物を。

だがさあ私に言つてくれ、お前の心にどんな風に見える

か？

というのはひどく心と気持ちとは私自身に命じるのだ

あそこへ、アカハイア人らの広汎な陣営の中へ船のとこ

ろへ行くことを。」

このように言つた、すると女は泣きだしたそして言葉

で答えた、

「まあ、どこへあなたの分別は行つてしまったの、それで

もつてこれまでは

客人たちにもあなたが治めている人々にもあなたが有名

であつた？

どうしてアカハイア人らの船に独りで行こうと思われ

のですか、

あの男の両眼の中に彼はあなたの大勢のそして強い

息子たちを殺した、本当にあなたの心は鉄で出来ている。

というの

はもし彼があなたを捕えそして両眼で見ようなら、

彼は残忍な不誠実な男ですから、あなたを憐れまないで

しょう、

また少しもあなたを敬わないでしよう。ですから今は遠

くから哭みましょう

205

200

だが神のようなアキヒルレウスが泣いて泣き足りたとき、
そして彼の胸から手足から欲求が出て行った時、
忽ち座から跳び上つて、老人の手をとって立ち上がらせ、
灰色の頭と灰色の顎とを憐れみながら、
そして彼に声を発して翼のある言葉語り掛けた、
「可哀想なお人、多くの不幸を心に耐えてお出でだ、
どのようにして敢えてたった一人でアカハイア人らの船
のところまでお出でだ、
男の眼の前にその男はあなたの大勢の優れた
御息らを殺戮したのだ？ あなたは心は全く鉄で出来
ている。
いやどうぞこの座に坐して下さい、そして苦しみは
心の内にそおつとさせて置こうではありませんか悲しい
けれども、
凍える慟哭からは何の結果も生まれないのだから、
このように惨めな死すべきものに神々は糸を紡がれるの
だから、
苦しみながら生きるように、そして御自身らは何の苦も
ない。
というのは二つの大霧がゼウスの中庭に置かれているの
だから
ゼウスが与える悪い贈り物の、そして片や良い物の、
その者に雷霆を投げるゼウスは混せて与える、

525

520

515

すると彼は時に不運に時に幸運に出遭つ、
また不運の壺から汲取つて与えたものに、悲惨を置く、
そして彼を酷い餓えが聖なる地上に逐つ、
そして彼は彷徨う神々にも死すべきものにも認められ
ず。
そのようにペーレウスにも輝かしい贈物を下さつた
生まれたとき以来、というのは全ての人間に卓越してい
たから
財産と富とにおいて、そしてミュルミドン人らを支配
した、
そして死すべきものである彼に女神を妻と神々はなさつ
た。
だがその彼の上にさえゼウスは不倖を置き給つた、つま
り彼には
邸には後嗣ぎの子供たちの出生がなかった、
いや一人の早死を予約された子供を生んだ、だが決して
彼を
年取つた彼を省みることが出来ない、祖国から極めて遠
くに
トロイイーに坐っているのだから、あなたとあなたの御
子らの厄介の種となりつつ。
そしてあなたについて、御老人よ、かつて私たちはあな
たが幸運であると聞いた、

540

535

530

レスボスの海、マカロスの栖、からこつち

プブリユギーエの高地までそして涯のないヘルレースポ
ントスまで、

その彼らにあなたは、御老人よ、富と子息の点で卓越し
ていると人々は言つた。

ところが天なる神々がこの禍いをあなたに齎して以来、
絶えずあなたの町の周囲には戦さと殺人とがある。

耐えて下さい、どうかあなたの心に果てしなく嘆かない
下さい。

御子息のことを嘆いても何もいいことはないのですから、
彼を生き返らせることもないでしょう、他のもつと悪い
ことが起きませんように。」

するとその時彼に答えた神に似る老人プリアモスが、
「決して私を座に坐らせないでくれ、ゼウスの育みし者よ、
ヘクトールが

幕舎の中で葬られずにある間は、それより大急ぎで
解放して下さい、私が眼のあたり視るように、そしてあ
なたは贖いを受け取って下さい

多くの贖いを、それらをあなたに私らは持つて来たので
す、あなたはそれらを享受すると好い、そして帰ると
好い

あなたの父祖の国へ、私を先ずは許してから
私自身が生きるのをそして太陽の光を見るのを。」

555

555

すると彼を眉の下から睨まえて足の速いアキヒルレウス

が言つた、

「もはや今は私を苛々させるなよ、御老人、私は自分でも
思っている

ヘクトールを釈放することを、ゼウスから私に使者が来
た

母が、彼女が私を生んだ、海の老人の娘だ。

そしてあなたのことも分かつている、プリアモスよ、心
で、私に知られずにはいない、

神々のどなたかがあなたをアカハイア人らの迅い船に導
かれたことを。

というのは死すべきものは敢えて来ない、若盛りの一人
であつても、

陣営に、つまり見張りが見逃しつこない、それに門を
簡単には外すことが出来ない我々の門の門を。

だから今は私の心を苦しみの中でこれ以上波立てないで
くれ、

決してあなたを、御老人よ、あなたその人を幕舎の中で
私が放つて置かないように

嘆願者であるあなたを、そしてゼウスの言付けを私が破
らないように。」

このように言つた、すると老人は恐れられたそして言葉に
従つた。

570

565

560

するとペーレイデースは家の扉からライオンのように跳び出した、

独りではなかった、彼と共に二人の従者が従った、勇者アウトメドーンとアルキモスが、この二人を最も戦友たちの中で重んじていた死んだパトロクロスに次いで、

彼らはその時軛から馬たちと驟馬たちとを解き放った、そして伝令使を彼の老人の呼びわり手を導き入れた、そして座に据えた、そして好く造られた車から

ヘクトールの頭の数え切れない贖いを取った。だが取り置いた二つのマントと好く織られた長着^{キヒトン}とを、屍を包んで家へ持ち帰るために与えるように。

そして女奴隷らを呼んで洗い清めるように又油を塗るように命じた、

遠くに運んで行って、プリアモスが息子を見ないように、彼が悲しみの心で怒りを含まないように

子供を見て、そしてアキヒレウス自身の心が暴発しないように、

そして彼を殺さないように、そしてゼウスの言いつけを破らないように。

そこで彼を女奴隷たちが洗い清めオリブ油を塗ってから、彼の周りに美しいマントと長着^{キヒトン}を着せかけた、

585

580

575

自身で彼をアキヒレウスは持ち上げて担架の上に置いた、そして戦友らが手を貸して好く造られた車の上に持ち上げた。

そしてその時彼は叫び声を挙げた、そして愛しい友に語り掛けた、

「私を、パトロクロスよ、怒らないでくれ、君が聴くことが出来たにしても

アイデースに居ても私が神のようなヘクトールを引き渡したと

彼の父に、相応しからぬ贖いを私に呉れたのではないのだから。

「君にも又私はこの中から相応しいだけ分配するからな。」このように言った、そして幕舎の中へ戻って行った神

のようなアキヒレウスは、
そして綺羅を盡くした安楽椅子に坐った、そこから彼は立ち上がったのだった、

反対側の壁の、そしてプリアモスに向って言葉を言った、

「あなたの息子は解放された、老人よ、お言いつけのように、

そして担架に横たわっている、明るくなる曙と共に

御自身で行って見られるでしょう、だが今は食事のことを思い出しましょう。

600

595

590

というのは髪の毛の美しいニオベールでさえ食事のことを
思い出したのだから、

彼女の十二人の子供たちが邸で亡くなったのに、
六人は娘たち、六人は若盛りの息子たちであった。

彼らをアボルローンが銀の弓から矢を放つて殺した
ニオベールに怒つたので、そして彼女らを矢を降り注ぐア
ルテミスが、

彼女が頬の美しいレートーとしばしば自分を同等に見た
から、

二人しか生まないではないかと彼女は言つたものだ、彼
女自身は大勢生んだのに、

それでたつた二人だったが彼らは全部を殺した。

彼らは九日間流血の中に置かれた、誰も居なかつた
葬るべきものが、人々を石に変えたクロニオンが、

彼らを十日目にウーラノスの住人たち神々が葬つた。

彼女でさえ食事のことを思つた、涙を流して疲れたから。
そして今はどこか巖の間に、孤絶した山中に、

シビュロスに、そこは女神たちの臥し処だと言つ

ニユムペーへの、彼女らはアケヘローイオスに沿つて踊
り廻る、

そこで石ではあるが神々から受けた悲しみを嘔みしめて
いる。

さあ私たち二人も思い出そう、神に似た御老人よ、

615

610

605

食事のことを、それから又愛しい子供のことを泣けばよ

い、

イーリオスに連れ帰つてから、彼はあなたによつて大い
に泣かれることである。」

こう言つた、そして跳び上つて白い羊を追いアキヒル
ウスは

首を切つた、すると戦友たちが皮を剥いで手際よく作法
に従つて捌いた、

上手に切り分けて焼き串で突き刺し、
念を入れて焼き上げ、全てを串から引き抜いた。

するとアウトメドーンがパンを取つて食卓で分配した
美しい籠に入れて、するとアキヒルウスが肉を配つた。

そして彼らは準備され前に置かれた御馳走に手を伸ばし
た。

こうして飲み物と食べ物とへの欲求を追い払つてから、
全くダルダニデースのプリアモスはアキヒルウスに驚嘆

した、
何と大きく何と美しかつただらう、神々にそっくり似て
いるのであつたから、

又彼はダルダニデースのプリアモスに驚嘆したアキヒル
ウスは、

その美しい容貌を見かつ声を聴いて。
こうしてお互いを見合い喜んでから、

630

625

620

彼に最初に語り掛けた老人神に似たプリアモスが、
 「今はすぐに私を寝せてくれ、ゼウスが育んだものよ、も
 はや

635

甘い睡りの下で楽しもうではないか横になって、
 というのは決して両眼は私の顔の下で閉じなかつたから
 あなたの両腕の下に私の子供が命を失つてからこのかた、
 そして断えず嘆き数え切れない苦しみを過こしている、
 中庭の閉じ込められた場所を泥の上を転がりながら。
 今やまさしく穀物も味わつたし燦めく酒も
 食道を通つた、以前には少しも食べられなかつたのだ
 が。」

640

と言つた、するとアキヒルレウスは戦友らと女奴隷たち
 に命じた
 ポルチコの下に寝台を置くことをそして美しいシーツを
 紅のシーツを掛けることを、そしてその上に毛布を拡げ
 ることを、

645

そして毛の掛布団をその上に掛けるように。
 すると彼女らは広間から炬火を手持って出て来た、
 そして直ちに二つの寝台を大急ぎで拡げた。
 そして彼に面白そうに語り掛けた足の速いアキヒルレウス
 が、

「外に寝なさい、いとしい老人よ、アカハイア人らの誰か
 が

650

ここにやつて来ないように参謀が、彼らは私にいつも
 謀を謀るのだ傍に座つて、慣習がそうであるように、
 もし彼らの誰かがあなたを見たなら黒い夜を通じて、
 直ちに彼は兵士らの長アガメムノンに告げるだろう、
 そしたら屍引き渡しの延引が生じるだろう。

655

だがさあ私にこのことを言つて下さいそして真実にすつ
 かり言つて下さい、
 何日間をお望みか神のようなヘクトールを葬るのに、
 その間私自身は留まりそして兵士らを引き止めましょ
 うから。」

すると彼にその時答えた老人神に似たプリアモスが、
 「もしも全く私が神のよつなヘクトールのために弔いをす
 ることをお望みなら、

660

このように私のためにして下さることに於て、アキヒレ
 ウスよ、嬉しいことを置いて下さるように、
 というのはあなたは御存知だどのように私たちが町の中
 に閉じ込められているか、そして薪は遠い
 山から運ぶのに、そして大いにトロイア人らは恐れてい
 る。

九日間彼を邸で哭きたい、
 そして十日目に我々は葬おうそして人々に饗しよう、
 そして十一日目に彼の上に塚を造らう、
 そして十二日目に我々は戦おう、もしそうしなければな

665

らないならば。」

すると彼に再び答えた足の迅い神のようなアキヒルレウスが、

「あなたのためにそのよつになるでしょう、老人プリアモスよ、あなたがお願いいつけの通りに、
というのはそれだけの時間を私たちは戦さを控えるでしようからお望みだけの時間を。」

670

このように言つて手首のところを老人の手を右の手を握つた、決して心に怖れないように。

彼らは家の前庇にそこに寝た、

伝令使とプリアモスとは、深い智慧を心を持って、

だがアキヒルレウスはよく造られた幕舎の奥の間に横になつた、

675

すると彼に頬の美しいプリセイイスが添い寝をした。

他の神々と戦車に乗るつわものらは

一晚中眠つていた、柔らかい睡りに負けて、

だが救助者ヘルメイアースを睡りは捉えなかつた、

心の中で考慮している彼をどのよつにしてプリアモス王を

680

船陣から連出そつかと聖なる門番の目を免れて。

それで頭の上に立つたそして彼に言葉を言い掛けた、

「老人よ、それでは何の不都合もあなたには感じられない

のか、そのよつにまだ寝ている

敵の男らの中で、アキヒルレウスがあなたに許したからと言つて。

たつた今も息子を贖い戻した、そして多くを与えた、

だが生きているあなたのためならその三倍もの身代金を

払ふことにならう

あなたの後方に残された子供たちは、もしもアガメムノ

ーンが

アトレイデースがあなたを知つたなら、そしてすべての

アカハイア人らが知つたなら。」

このように言つた、すると老人は恐れた、そして伝令

使を起こした。

そして彼らのためにヘルメイアースは馬たちと驟馬たち

とに軛を置いた、

そして速く自身で駆つた陣営を通り越して、誰も知らな

かつた。

だがよく流れる河の渡しに彼らが着いた時、

渦巻くクサントホスの、その河を不死なるゼウスが生ん

だ、

ヘルメイアースはその時大いなるオリュムポスへ立ち去

つた、

サフラン色のペプロスを着た曙が全ての大地の上に拡が

つた、

彼らは呻きながら泣きながら町を目指して駆つた

695

685

690

馬たちを、そして驟馬たちは屍を運んだ。他の誰も
逸早く知らなかった男たちの又美しい帯をした女たちの、
カッサンドレーがであった、黄金のアプフロディーテー
に比べられる、

ペルガモスに登って行って愛しい父とを認めた

座席に立っているのを、そして町に大声で触れる伝令使
とを、

そして彼とを見た驟馬の牽く車の上に担架に横たわつて
いるのを、

それで彼女は泣き叫びそして町中に届くように叫んだ、

「見て、トロイア人らよトロイア女らよ、行ってヘクトー
ルを、

もしもかつて生きて戦さから帰って来るのを

あなた方が喜んだのなら、大きな喜びであったのだから

全ての市の全ての人々の。」

このように言った、誰もそこに町に留まらなかつた男

も

女も、というのは皆に耐え難い苦しみが来たから、

彼らは城門の近くで屍を運んで来た人に遭つた。

真先に彼に向つて愛しい妻と女主母親とが

自らの髪を引き抜いた、よく回転する車に飛付いて、

頭に縋付いて、そして群衆は泣きながらその周りに立つ
た。

710

700

705

そして今やまさに一日中陽が沈むまで

涙を流してヘクトールを悼んだことだつたらう門の前で、

もし戦車から老人が人々の間に語り掛けなかつたなら、

「私の驟馬に通れるように道を開けて下さい、そしてそれ
から

飽くまで慟哭するがよい、私が家へ連れ帰ってから。」

このように言った、すると彼らは分れて立つたそして
四輪車に道を開けた。

そして彼らは素晴らしい家に運び入れてから、それから彼
を

彫刻で飾られた寝台2に置いた、そして傍らに歌い手らを

据えた

挽歌の音頭取りらを、彼らは悲しみの歌を

彼のために歌つた、するとそれについて女たちが泣いた。

そして彼女らに混つて白い腕のアンドロロマケヘーが哭を

先導した、

つわもの殺しのヘクトールの頭を両腕で抱えながら、

「夫よ、あなたは若いのに命を失つた、そして私を後家に
して

邸の中に取り残す、そして子供はまだほんのいとけな

年なのに、

あの子を不運なあなたと私が生んだのでした、私は思わ

ないあの子が

725

720

715

若盛りに来るだろうとは、というのはその前にこの市は
すっかり

壊されるでしょう、何しろ護り手であるあなたが亡くな
ったのだから、あなたは市そのものを

いつも護つて来た、そしていとしい妻といとけない子供
を見た、

この女たちこそはすぐに中を割つた船に連れて行かれる
でしょう、

そして私もその中にいるでしょう、お前も又、子供よ、
この私に

付いて来るでしょう、そこでお前は不似合いな仕事をす
るでしょう、

柔和でない主人の前で骨を折って、あるいはアカハイア
人らの誰かが

腕で捉えて城壁から抛るだろう、おぞましい死、
怒って、ヘクトールが彼の兄弟を殺したことを

あるいは父を、あるいは息子かも知れない、何しろとて
も多くのアカハイア人らの

歯がヘクトールの掌の中で限りもない大地を噛んだのだ。
というのは柔和ではなかったのだお前の父親はおぞまし
い戦に於て、

だからその彼を人々は町を挙げて悼んでいる、
そして両親に呪われた嘆きと苦しみとをあなたは置いた

740

735

730

のだ、

ヘクトールよ、そして私には最も酷い苦しみが残るでし
ょう。

というのは私に死に際して寢床から両手をあなたは差し
伸べて下さらなかつたし、

又何も私に親しい言葉を下さらなかつた、それをいつも
夜も晝も涙を流しながら思い出そうに。」

泣きながらこう言つた、するとそれについて女たちが
泣き声を挙げた。

すると彼女らの中で今度はヘカペーが激しい慟哭の音頭
を執つた、

「ヘクトールよ、私の心に全ての子供たちの中で何よりも
最もいとしい子よ、

えゝ本当に思えば生きている時からお前は神々のお気に
入りでした、

そして神々はお前を気に掛けて来られた死に定められて
居たとは言え、

というのは私の他の子供たちに関しては足の速いアキヒル
レウスが

売り売りした、捕まえては、不毛な海を越えて
サモスやイムブロスや露のかかるレームノスへ、

そしてお前から魂を細長い穂先の槍で奪つてから、
何回も引き摺つたのでした彼の戦友の墓の周りを、

755

750

745

バトロクロスの、彼をお前が殺した。そのようにしても彼を立ち上がらせることは出来なかった。

そして今こんなに水々して生きるが如く邸の中に

お前は横たわっている、彼の如くに、その彼を銀の弓の

アポローンが

その柔らかい矢で攻めて殺した。」

このように言った、そして止むことのない悲嘆を惹き

起こした

するとその次に女たちの中でヘレネーが三番目に慟哭の

音頭を執った、

「ヘクトールよ、私の心に全ての義兄さんの中で最も好き

な方よ、

全く私の連れ合いは神に似たアレクサンドロスだけれど、

彼が私をトロイエーに連れて来たのです、その前に死ん

でしまった方が良かった。

というのは今やもう何とこれで二十年になります

あそこから来てから私の故国を離れて来て、

それなのにあなたから悪口や辱めをかつて聞かない、

いいえもし他の誰かが邸で私をもどこうものなら

義兄さんたちの又は義姉さんたちの又は素敵なペプロス

を着たお嫁さんたちの、

又お姑さんが お舅さんはお父さんのようにいつも優

しい

770

760

だがあなたは言葉で説いてその人を引き止めて下さった、あなたの優しさでそしてあなたの優しい言葉で。

それだからあなたをと同時に非運な私を心に嘆いて泣き

ます、

というのは他の誰が一体広いトロイエーで私に

親切で親しいでしょう、全ての人は私に怖じ気を振るう。」

このように泣きながら言った、するとそれにつれて数

え切れない人々が哭した。

すると人々の中で老人プリアモスが言葉で言った、

「今は集めなさい、トロイア人らよ、薪を町に、決して心

に

恐れるなアルゴス人らのしつかりした待ち伏せを、とい

うのはアキヒルレウスが

私を黒い船から送り出しながらこう保証したのだから、

それまでは攻撃しない、十二日目の曙が来るまでは。」

このように言った、すると彼らは車に牛と驟馬とを

繋いだ、そしてそれからすばやく町の前に集合した。

九日間彼らは無数の薪を集めた、

そして十日目の死すべきものに光明を齎す曙が現れたと

き、

その時彼らは剛胆なヘクトールを涙を流しながら担い出

した、

そして葬り火の一番上に屍を置いた、そして火を掛けた。

785

780

775

そして朝に生まれた薔薇色の指の曙が輝いた時、
その時こそ高名なヘクトールの葬り火の周りに皆は集つた。

そして皆が一緒に集合して集ったとき、

第一にきらきらする酒で葬り火を消した

すつかりと、焔が上に拡がる限りは、そしてそれから

白い骨を拾い集めた兄弟たちと友人たちとが

泣きながら、大粒の涙が頬を流れ落ちた。

そしてそれらをつかんで金の骨壺の中に置いた、

紫色の柔かいペプロスで覆って、

そして素早く空洞の墓穴に置いた、そしてその上から

大きい石でしつかりと覆った、

そして急いで墓土を盛った、そして周り中に見張りを置

いた、

以前によい臆当てのアカハイア人らが攻撃して来ないよ

うに。

そして墓を築くと戻って行った、そしてそれから

皆すつかり一緒に集まって素晴らしい御馳走を食べた

プリアモスの館で、ゼウスの育んだ王の。

このように彼らは馬を馴らすヘクトールの葬儀をなし

たのだ。

第二十四の歌

イーリアス 完

800

795

790

第二十三の歌

註(2) 二五七行目から主語はアキヒルウスである。

(3) エウメーロスもその父アドメーロスも、第二の歌の船
のカタログと、ここ競馬のところに出来ただけである。 二六三行目

(4) アリーオン・アドレーストスの速い馬はテヘーベ
傳説圏に起源を持つ。古註Dによると彼はボセイドーンとエ
リニユスとの間の(馬の形をした)子供で、叙事詩圏に由来
する。 二八八行目

(5) トロースの馬に同じ、第五の歌二二三行及び二六一
七二行とその註(本誌第七號)参照のこと。 三四六行目

(6) エウメーロスは二八九行目で「アドメーロスとの愛し
い息子」と呼ばれてゐるが、ここ及び第二の歌七六三行では、
ペヘレーティアデースといふ父稱が用ゐられてゐる。ペヘ
レースは彼の祖父である。 三四八行目

(7) この話はディオメーデースの父テューデウスの話に似
てゐる。(四・三八五 九〇参照)。オイディプスはここで
はテヘーバイで死んだことになってゐる。オデュッセイア十
一・二七五 八〇では彼は妻の自殺後もテヘーバイに王とし
て留つたといふ。彼がアテヘーナイで死んだといふのはアテヘ
ーネー人らの、コロノスで死んだといふのはソフォクレスの

三三六行目

創作であるらしい。

六七九行目

(8) 鐵が貴重品であり、ポリスでそれが供給された時代である。

八三五行目

第二十四の歌

註(1) イーロスの塚はしばしば目印になる十 四一五、

十一 一六六、三七二。

三四九行目

註(2) この語は三 四四八と二こと二箇所に出てくる。

「彫刻のある」とが「穴の中にすっぽり埋められた」といふ意である。もう一箇所十四 一四二にも見られるが、それは「ピアスをした(耳)」の意である。

七二〇行目

例言

四十六 輪讀會が始つたのは一九八三年五月十日である。それから丸々十七年後の今日二〇〇〇年五月二十九日に「イーリアス 完」といふ文字を書くことは、大層いい氣持ちである。しかしこれが印刷されるのもう一年後であり、それまでにこれは回覧され、補正され、註を附されなければならぬ。始つてから十八年後に輪讀會譯は完成することになる。この分の殆どをμは韓國で打つた。あの國の人々の優しさをμは忘れない。μが日課にして、これを打つてゐることを知つた人々は、我が事のやうにそれを氣

遣ひ、その進行具合を尋ねてくれた。

四十七 輪讀會は一九九九年六月一日からオデュッセイアに

入り、イーリアスと全く違ふ作品の感じに戸惑ひながら、しかし、それはそれで中々楽しんでゐる。この號が印刷された後、二〇〇一年の四月十日には第四の歌の三〇六行目からはじまり、近頃は五十行位づつ進行してゐる。四月にはフランスに五年間留学したνが歸つて来て復歸する筈である。この樂しみを共にしようとする人は誰でも歓迎される。火曜日の八時四十五分に言語文化研究所にお出で下さい。次號から「オデュッセイア」を連載し、何年か後に再び「完」といふ文字を書きたいものである。

四十八 ここに出したのは第二十三の歌の後半と第二十四の歌である。輪讀會はそれを一九九八年一月二十二日から九年の六月一日までかけてやつた。九八年はνとαとμとがトロイに出掛けた年である。